

万象 平成十四年十一月十三日第三種郵便物認可
令和七年六月一日発行（毎月一回一日発行）
第二十四卷 第三号（通卷二七九号）

万象

B A N S Y O

六
月
号

2025. 6



六月の句

蜥蜴と吾どきどきしたる野原かな

大木あまり

季語は「蜥蜴」。かつて苦手（昆虫全般）であったが俳句を始めてから気になる存在となった。形態は太古の恐竜を想わせつつも色合いが魅力的。青蜥蜴や瑠璃蜥蜴が庭に出てくるとこわごわ見入ってしまう。昨今お目にかかる事が少なくなり残念である。

作者の大木あまりは武蔵野美術大学洋画科出身で大の生物好き。中七の素直な表現は出会ったこの対峙の場面に最上の喜びを感じているから。しかし読み手の自分はこわごわからまだ抜けきれない。こちらの鼓動もより高まってくる。臨場感溢れた一句。

（荻野加壽子）

令和七年

六
月
号

万象

B A N S Y O

卯の花の 匂う垣根に
時鳥 早も来鳴きて
忍音もらす 夏は来ぬ

佐佐木信綱 作詞「夏は来ぬ」より

万 象

令和7年6月号

主宰作品 さくら餅……………江見悦子 4

万象の窓³⁹ 俳人協会総会に参加して……………江見悦子 5

名誉顧問作品 花の雲……………小林愛子 6

風音集

中村 千久・福島せいぎ・柳澤 宗正・中條 睦子
松原智津子・亀田やす子・沢辺たけし・吉中 愛子
榎本 文代・神田美穂子・井村 和子・前田貴美子

風音散步³¹ (六月号)……………小林 愛子 10

同人作品

江見悦子選……………11

同人作品の佳句……………江見悦子選 31

同人会だより

会長就任ご挨拶……………中條 睦子 32

4月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

珈琲ぶれいく⁶¹……………亀田やす子 33

佳句佳句しかじか 同人作品鑑賞 (四月号)……………佐藤 和子 36

同人特別作品

芹の水……………岡村 純子 37
螢 狩……………編集 部 38

特別作品評 (四月号)……………中條 睦子・渡真利真澄・疋田 華子・三好かほる 39

私のこの一句……………第七回 中山純子記念俳句賞 発表 40

第七回 中山純子記念俳句賞 発表

正 賞 白山に雪……………伊藤美音子 41

正 賞 極月の水……………神田美穂子 42

準 賞 白川郷……………成瀬真紀子 43

佳 作 おほばこの花 下嶽 孝一 43

特 別 賞 初 午 今越みち子 44

選評・順位表 44

応募者一覧 48

北から南から 富山県高岡市 (富山) 成瀬真紀子 49

曾根 満氏を悼む 編 集 部 50

続・風のしをり⑱ 子規と私(五) 細見綾子 編 集 部 52

万葉の抒情② 『万葉集』にたずねる抒情の源流② 橋本 清 53

万象ノオト「ランドセル」 長谷川洋子・入山 繁幸・林 早苗 54

巻頭作家(五月号) プロフィール 奥澤よし江(市川) 福武 幸子・高橋 一夫・神田美穂子 56

万象作品 江見悦子 選 57

第二十三回「万象」新人賞速報 67

万象作品の佳句 江見 悦子 68

新中央句会報(3月例会) 70

内藤恵子氏を偲ぶ 先生、会いに来ました 南雲 秀子 73

「万象」句会一覧 74

「万象」組織と業務分担(令和7年4月から) 77

ルビーの小函(六月号) 編集部・校正担当 79

東西南北 80

さくら餅

江見悦子

(主宰)

春の電枯山水の庭はしる
坂下は蛇道丁字香る道
花にらの薄紫も異人墓
芽木の風文学館へ橋わたる
すれ違ふピカソの顔の春コート
坂上る源義邸や緑立つ
もてなしや綾子の軸とさくら餅

角川源義邸二句

俳人協会総会に参加して

江 見 悦 子

今回は少々硬い話になりますがご了承下さい。

3月17日に開催された第54回俳人協会総会に出席しました。「万象」は結社として俳人協会（社団法人）に属し、同人の方の多くは協会の一員になっています。協会は、1961年、現代俳句協会から有季定型派の俳人が分離する形で設立され、初代の会長は中村草田男です。「風」の沢木欣一先生は会長を2期務めています。東京都新宿区百人町に建てた俳書専門図書館である「俳句文学館」を運営し、各種の事業を開催、実施し、毎月会報を会員宅に配送しています。

総会は出席327名、委任状7544名で成立。会員数は昨年12月の時点で13580名、平均年齢は77・9歳。昨年は新規会員が590名でしたが、逝去などで退会した方が1101名であり、会員数が減少しているという課題が報告されました。議題は第6号議案まですべて可決されましたが、新たな役員人事では、60代の理事が6人就任し、20名の理事全員が60代、70代で占められることになりました。残念だったのは、名誉会員18名の中にあつた内海良太名誉主宰のお名前がなくなり、名誉会員が17名になったと伝達されたことでした。

8年間会長職にあつた大串章氏が退任され、第9代会長として73歳の片山由美子氏が就任され、4月からの陣容の若返りが印象的でした。

大きな課題として、会員減に伴う経済面の危機が報告され、新年度からの会費値上げとなりました。46年ぶりの値上げになるそうです。会員の会費や寄付の協力に加えて、運営全般の見直しを期待したいところです。

総会終了後、「令和6年度俳人協会四賞授与式」が行われました。選考について等詳しくは会報1、2、3月号に書かれています。この日は直接、選考委員の講評や受賞者の言葉を聞いて人となり等についても感じる事が出来、良い時間を過ごすことが出来ました。

花の雲

小林 愛子

(名譽顧問)

家鼠糞を散せるおぼろかな
鶉の腹伸びきて花の土佐水木
如月や蕾冷たき花活けて
初蝶を目で追ふ人にならびけり
満開の中より落花二三弁
花の雲老人ホームは窓開けよ
花の雨指で溶きゐる吉野葛

春の猫

中村千久

(編集人)

乙女椿あふれマリア像真白
薔薇の蔓打ちつばなしの白壁に
ぷつぷつとうすらひの泡つぶやけり
小上がりには並びし靴や春の泥
少年を引つ張るリード風光る
八角のにはふ路地から春の猫

春の水

福島せいぎ

(顧問)

春の水ごぼごぼと鳴り走りだす
うららかや傷なき空に鳥のこゑ
赤インクにじむペン胼胝春の雪
堰の水魚道へ分つ菜の花忌
老人は蕎麦屋へバレンタインデー
寺の子が屏風をたたむ夜の寄席

巢組み

柳澤宗正

(顧問)

鴉二羽巢組みの生木ちぎりをり
列島の山火事消えて木木芽吹く
カーテンを開けあるホーム花の昼
ランドセルの御被受くる入学児
春雷や息をひそむる夜の街
茶畑や斜面の先に富士の峰

利休忌

中條睦子

(同人会会長)

鶉の骸降りつつみたり春の雪
流れ着くものも加へて烏の巢
利休忌の竹林に降る雨の音
月光に明日待つつ紅の藪椿
ミモザ咲き見慣れたる町鮮しく
鳥帰る能登へつらなる空青し

鳥 帰 る

松原智津子

(北海道)

雪囲解かれし木木の踊ること
道乾き北国の春遅ればせ
鳥帰る夜明けの湖を今日この日
水楢の芽立ち不揃ひ揺れ止まず
春愁に浸らぬつもり窓磨く

堅 香 子

亀田やす子

(栃木)

干し上げの谷中湖広し春霞
慰霊碑へ土手の菜の花一束ね
堅香子やトロンボーンを抱へ来る
片栗の群生野外コンサート
うぐひすや貝殻混る畑均し

二時四十六分

沢辺たけし

(千葉)

原っぱの芽吹き促す子らの声
四つ目垣雀の散す春の雪
との曇る二時四十六分亀鳴けり
耕しのあひ北空へ黙祷す
外灯のあかりに雨の桜かな

山ざくら

吉中愛子

(東京)

風ざわたる落ちては宙へ春の鳥
谷戸も奥初音につづく鳥の声
満開のつつじに蜂の深入りす
山ざくら山もろともに前のめり
春風や染大島の身八口

角川庭園

甘茶寺

榎本文代

(神奈川)

ゆるやかに雲ほどけゆく花辛夷
 囀にふくらんでくる雑木山
 燕くる元町裏の河岸通り
 女学生ひとり遅れて花の坂
 甘茶寺やんちやな声のあがりたり

四姉妹

神田美穂子

(静岡)

老いてなほ四人姉妹や雛飾る
 貝釦きつちり嵌めて新社員
 スリッパに遊ばれてゐる子猫かな
 風光るダンクシュートの決る時
 野遊びや岳麓ひと日よく晴れて

梅

林

井村和子

(石川)

梅林に久闊叙する髪白き
 青ぬたや酔にも味噌にも母の味
 討つまじき吉兆といふ朝の蜘蛛
 合掌の里曲さとわを巡る祭獅子
 隣の子縄跳び百を数ふまで

第二章

前田貴美子

(沖縄)

猫の目に残る寒さのみづあさぎ
 恋猫の人恋ふことも雨煙る
 うらうらとうつらうつらと第二章
 朧月今日のひと日の眼鏡とる
 酒残し二番座に客朧なる

※二番座……仏間

風音散歩

③ (六月号)

小林愛子

老人は蕎麦屋へバレンタインデー

福島せいぎ

一読して何となく可笑しさがこみあげてくる。愛の日だと言つて、チョコレートを手に浮き立つ若者を見ている老人滑稽ではあるが嘲笑を誘うものではない。「バレンタインデー」の表現の独自性により、動かし難い季語の「蕎麦屋」見え過ぎては駄目なのだ。写生のちよつとした新発見と個性的な発想による俳諧味である。それは時として滑稽であり、現実に対してシニカル、俳句とは批評の詩でもある。

山ざくら山もろともに前のめり

吉中愛子

山桜は関東以南の山地に自生し、新葉とともに咲く白花は気高く美しい。独立した一品種名であるが、句や歌に詠まれた山桜は、訪れた土地に自生する桜を指すことが多いという。句の「前のめり」は、深い溪谷に切り立つ山全体が、まるで倒れ掛かるように見えるのである。根を下ろした桜の新鮮さ、厳しい環境に見る桜は、はっとする美しさである。

青ぬたや酢にも味噌にも母の味

井村和子

「青ぬた」には昭和の香りがする。分葱、胡葱、芥子菜などをさつと茹で、魚介類と一緒に酢味噌で和えたものである。

が、せわしない世の中、若い人の食卓に上るのであるうか。

金沢の母上の料理の腕前は洗練されていた。いつも食した「青ぬた」はまた母恋の味、思い出は懐かしくも美しい。

甘茶寺やんちやな声のあがりたり

榎本文代

4月8日の仏生会の折、寺院は花見堂を置く。祀られた誕生仏に参詣者は甘茶をそそぐ。この日は子供が大勢見えた。句意は明瞭、子供の声を聞くとほつとして元氣が出てくる。掲句の句法は「取合わせ」ではなく、物や季語そのものを詠む「一物仕立て」。ややもすると説明、ただ事などと言われるが、「やんちやな声」の平易な言葉が再発見である。

猫の目に残る寒さのみづあさぎ

前田貴美子

「みづあさぎ」(水浅葱)は薄いあさぎ色、すなわち薄い藍色を指す。季語の「残る寒さ」の余るという感覚は微妙。

猫の目の色を、「みづあさぎ」と捉えたところが美しい。

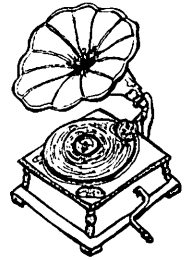
この句の佳さは「猫の目に」のあと一氣に読み下した朗誦性にある。終わりは、ア音の重なりで明るい。

鳥帰る夜明けの湖を今日この日

松原智津子

秋冬に渡つてきて日本に越冬した渡り鳥が、春には繁殖地の北方に帰る。北海道であれば鶴、白鳥、雁、鴨などの大形の鳥が整然と群れを組み、鵜や鶺鴒などの小鳥はにぎやかに。渡りは「夜明けの湖」から発つらしい。「今日この日」とはどんな日? 毎日見に来ていたが今日こそなのである。

同人作品



江見悦子選

札幌 岡本敬子

料峭やけふはおのれを取り戻す
白樺の雪間雪間の汚れなき
黒土の艶ぬれぬれと雪のひま
斑雪野を樹液堰下げ子供たち
腰高に袴きりと卒業す

札幌 林陽子

うぶすなの空騒がせて雁帰る
病床の母へと届けたき春日
回り道して春月の時計台
甘党の夫へ鶯餅ふたつ
つま先に割る薄氷や日の温み

札幌 落合裕子

轟音のブルドーザーや雪を割る
街なかを北へ北へと雪解水
春の風邪電話口より掠れ声
春愁や触るれば痛み胸の傷
日に褪せし畳の表入彼岸

札幌 濱谷和代

荒東風や潮滴る魚干せる

定まらぬ調律の音牙返る
ひとひらづつ重なるやうに牡丹雪
春近し退庁の空縹色
春楡に雪解進む日和かな
平原は大きなキャンパス雪解光

札幌 大内和憲

内海良太郎追慕

春一番風のごとくに逝きたまふ
まや出しの牛舎は風の音ばかり
逃水に片足をさて入れたはず
春泥をまたひとり来る修行僧
アイヌチセにひかりの礫柳の芽

札幌 紅露恵子
※チセ……家（アイヌ語）

木の根明く光と風を呼ぶやうに
真夜中の煉瓦倉庫へ朧月
花ミモザ玻璃天井は空の色
啓蟄や空へ空へとクレーン車
歌声と涙ひとすぢ卒業す

札幌 大内マキ子

内海良太郎主宰逝去

師の声を聴く北窓を開け放ち
馬の背に日の矢飛びくる厩出し

小舟漕ぐ櫂の軋みも春めけり
強東風や縄を噛みゐる番屋の戸
夕茜V字崩して雁帰る

札幌 中鉢弘一

肌色に卵の殻の透きて春
耀ふて坂道走る雪解水
薄氷を溶してゐたり今朝の雨
降つて掻き掻きてまた降る忘れ雪
春暁やからまつ透ける日の大き

札幌 北浦詩子

風に舞ひ風に崩るる春の雪
緩みてはまた固れる雪解道
片付くる木製の雛日のにほひ
凍ゆるむ玄関ポーチの細き罅
あるだけの鍋磨きをり春一日

札幌 谷廣司

清らかな子の歌声や雪の野辺
霧水みな縹の空へ煌けり
朝靄の奥の奥より春日差
滑降の濃き影を追ふ春スキ―

初雛や眉の凜凜しき子の寝顔

江別 佐藤 藤

哲

裸婦像の肩にかかりし牧の雪
窓拭きて春のほこりを拭ひけり
鳥ぐもり出稼ぎ先の殉難碑
斑雪山十勝の山の遠かりき
笹起きの音斑雪野のそちここに

江別 太田 佳美

春の星 I S S に日本人
日溜りのこののどかさを被災地へ
風花へ幾度もジャンプ下校の子
暮れ遅しバス減便に歩き出す
あねいもと雛段に聴くオルゴール

新潟 高橋 ひろ

口曲げて泣いてをるなり仕丁雛
一竿となるとき帰る鳥となる
張りついてゐたのは墓石初蛙
崩れ墓へもお彼岸の花置かれ
みほとけへ仏の夫へ水仙切る

新潟 高野 松風

ざりがにの泥まとふまま春立てり
をちこちの番鳩くる春の土
後ろ髪ゆたかに束ね陶女雛
ふらここやお守り跳ぬるランドセル
ふつくらとひかりとり込み白木蓮

南魚沼 森山 暁湖

深雪晴声はづませて登校す
雪靴で込みあふ寺の納所口
神木を我が物顔に寒雀
そそり立つ雪嶺へ日の燦燦と
ワンカップぐいと叫れば春の天

益子 光岡 れい子

後ろ手に賢治来さうな春夕焼
菜の花を挿して楽しき厨ごと
泥あげて鯉動き出す遅日かな
焦げ跡の角組む葦や空の青
囀やプレーンオムレツふんはりと

芳賀 大村 かし子

探し物探せぬままや春の夢

梅林に句帳を開く木椅子かな
落味噌の香り漂ふ夕厨
お茶請けに匂ふ老舗の桜餅
いち早く休耕田より草萌ゆる

宇都宮 阿久津 勝利

雛の日や角にリボンの山羊二匹
荒れ果てし戦の大地草青む
子福者穴と破れの春障子
曲家の屋根の重たさ雨水かな
啓蟄や地球を削るブルドーザー

栃木 上岡 佳子

うららかや仔犬の二匹ベビーカー
初雲雀の声を探してよろめきぬ
川向うの槌音高し桜東風
雪嶺を蹴るや筋トレジムの窓
落語から始まるライブ彼岸寺

佐野 増田 幸子

ゆつたりと影曳く鯉や猫柳
梅の香の風のままなり濃くうすく
芽吹かんとひたすら宙へ細き枝

啓蟄や右肩の凝りほぐれたる
蹄の音連ぬる馬場や風光る

佐野 加藤 季代

足元の温る日差し牡丹の芽
長き藻の伏してたゆたふ春の川
仏像の施無畏の御手春埃
午後の日の黒蜜羊羹さくらどき
街路樹の一樹もつとも囀れる

佐野 阿部 澄

せかせかと野鳥啄む簪椿
朝日さす雨余の芝生の青みたる
切株にかすかな湿り鳥雲に
芽吹山吹奏楽の音合せ
山茱萸の明るき方へ歩を速む

佐野 芝宮 留美子

早春や相聞歌碑の薄くれなる
初音かな風おだやかな竹藪に
梅三分蕪村訪ふ寺に来て
春風やスケッチブックの淡き色
人寄する風にふくらむ花ミモザ

佐野 島田 和枝

落日や山山黒く冴返る
間伐材ふさぐ林道冴返る
二月尽枝先赤き雑木山
飛び越せる雨上りの畦落の臺
初音かな髪を梳きをる朝の窓

佐野 壳 野 緑

花手水に添へられ小さき内裏籬
四つに切る芋の芽傷をつけぬやう
梅が香や御詠歌沁むる山の寺
小櫓の芽丘へ染み入る吹奏楽
水芭蕉羽二重のごと咲き初むる

佐野 店 網 洋 子

風光るリズム合せてオール漕ぐ
到来の蛤夫の酒蒸しに
昨夜の雨青麦のあを深まりぬ
じやが薯植うばつ雨の降り出して
高高と芽吹く柳や亀泳ぐ

足利 大 木 茂

参道に根巻転がし苗木市

啓蟄の風に崩るる芋の畝
和菓子屋を入り婿が継ぎ桜餅
雲雀鳴く勾玉形の雲一朵
畦焼の黒き焰に追はれけり

土浦 澤 照 枝

隙間なく咲き満つ丘や黄水仙
松の芯四方に枝張る心字池
春の寺満願成就の朱印受く
耕の土のこぼるるつくば道
水脈長く引き静やかに残る鴨

加須 茂 木 弘 子

春愉し柵の間より山羊の貌
うららかや曼荼羅絵図を玻璃ごしに
蕪村句碑訪ふ弘経寺や梅真白
春光や馬のたてがみ梳く少女
ウツドチップの小径に沿うて犬ふぐり

さいま 山 本 右 近

水ぬるむ踏めば揺げる川原石
啓蟄や工事穴より不発弾
道のべに樹影と花影玉椿

春灯や矢来艶めく祇園路地
鳩のうみ空に一舟春の月

所沢 三好かほる

春みぞれ献立日記書きをれば
雛納タベ静かな雨となり
五十年の記念樹たりし梅蕉る
グリニッジの子午線またぐ春休み
引き近き白鳥羽搏つ湖泊り

所沢 南雲秀子

梅園を巡り来て買ふ餡団子
師の墓を句友と訪ふや沈丁花
椿落つ師の墓の辺の六地藏
高台に花葉畑見つにぎり飯
入彼岸道の駅まで花買ひに

千葉 田中道江

春空やスカイツリーは指呼の間
朧月薩摩切子の藍深し
鳩羽色残る日没春深し
風光る駈くる娘のラメの靴
牡丹雪後の一天明るくて

千葉 松浦陵保

耳当つれば水流の音春木立
記念集上梓を果し草萌ゆる
山笑ふまわたり宿の百羅漢
春の土蹴りて黙黙走りゆく
菜の花の畦に群る通学路

千葉 喜多恭仁子

見つからぬ右の手袋春寒し
足場組む音の乾きや冴返る
手つかずの能登の被災地春遠し
枝ぶりに惚れてシャッター梅三分
紅梅の香に白杖の止りけり

千葉 大月玲子

のどけしや湾をぐるりと鳶の笛
さるほほの朱鮮やかに吊し雛
春泥や国生みの神おはす国
汚染土の行方未だや草青む
亀鳴くや良太の声と覚えしが

千葉 竹澤竹里

桜餅白蛇に捧ぐ年をんな

道明寺のつぶつぶが好き桜餅
沈丁の香に誘はれて遠回り
じよつぱりを沈丁花の香包み込む
さくら咲くを標本木に教へられ

佐倉 大内佐奈枝

急に空暗く春霞とばす雲
雛の間座敷わらしの居るけはひ
踏み込めば湿り残して春落葉
鳥帰る期限の切れしパスポート
昨日今日忘れし人と青き踏む

佐倉 三屋英俊

良太師二句

鳥雲に過客に紛れ師は旅に
春光や御魂は千の風になり
草の芽は大地の息吹利根川光る
緑兎のころり反転風ひかる
耕の風に土の香ひるがへり
鍬置いて伸す背骨や山笑ふ

佐倉 横川良子

べか舟を繋ぐ運河や春の雪
鴨立ちて花粉塗れの白椿

独り聴くエリック・サティ臚の夜
斑雪役目終へたる無人駅
沼尻に英治の歌碑や蘆の角

四街道 奥 太雅

玄関にあらせいとうの香り活け
妻留守の南部若布の御御御付
人影に発てる鳥影木の芽晴
青竹の男結びや垣手入れ
簞に「けきよ」一声の初音かな

四街道 塗木翠雲

砂山を砂のた走る涅槃西風

内海名林主幸道情

春立つや青嶺のもとに逝かれしか
下駄箱の名札剝して卒業す
花ミモザ胸の高鳴る試着室
冴返る待合室の木椅子かな

船橋 山下良江

冬の空土鳩の声のくぐもれる
夕暮れて槓の木揺す冬の風
春泥を踏む音立てて鳩歩く
わが胸のあたりを巡る風呂の柚子

山椿日の差す方へ開きゆく

船橋 赤堀 洋子

鶯の群れ緋寒桜に蜜を吸ふ
火事後の静けさ柱滴りぬ
日溜りに大犬ふぐり敷き詰めて
雨の花壇鶯の啄む花薺
校庭の縄文土器の碑へ春日

船橋 久保村 淑子

啓蟄や使ひ古しの図鑑繰り
芽吹く木に登りゆらゆら女の子
風光る頬ふくらますチューバの子
竹林のゆらゆら春の雲を掃く
今日も糞置いて行きたり孕猫

船橋 宮本 加津代

花辛夷ひしめく空の青さかな
春寒の雨に打たれてゐる鴉
完治てふ診断を待つ日永かな
掃き寄せて嵩をなしけり落椿
わつと黄の増したる今朝のミモザかな

船橋 中嶋 久登

春を入れニツカポッカの膨れたる
白鳥の背伸ばす翼水面打つ
令和なる三月十日晴れ渡る
猫の恋総武本線ガード下
竿しなり釣糸伸ぶる春の風

船橋 山本とく 江

太子像みどり差したる牡丹の芽
紅白を思ひのままに梅の花
分け合ひし綾子の里の露の盞
八方へ枝振り分けて梨剪定
愛犬に飛び付かれたり春の泥

船橋 内田 郁代

天袋占めて雛の深眠り
野仏へグラスに満たす春の水
牡丹雪ふんはり落ちて消えにけり
膝小僧へ子規球場の春の泥
春の昼スーパーに買ふ歎異抄

船橋 古川 京子

短きの揺れのかそけき榛の花

二ヶ月の光や風の音つれて
田起しや長子は畦に突つ立つて
塩屋崎裳裾引きたる春の波
波音の復興の町初蝶来

流山 穂 莉 照 子

艶やかな木杳の尖り冴返る
己が名を忘れし父や梅固き
古雛いつも遙かを見てゐたり
春の雪薄皮残る茹で卵
夕日差す枝に囀の余韻かな

東京 名 和 政 代

手に取つて捲る絵本や春の宵
藍染の水玉もやう風光る
ほろ苦き京の佃煮路の磬
黒本の絹の手ざはり春の雪
外つ国の絵本とび出す花水木

東京 藤 田 裕 子

逝きませる師の文燃す鳥雲に
老眼鏡かけてまみゆるおひなさま
旅立ちの荷物はひとつ二月尽

ぐづぐづと床の中なり春障子
剪定や夕べの狹庭かぐはしく
脂を吹く桜老樹やあたたかき

東京 島 野 ひ さ

將軍の狩のあととや夕桜
廃業の風呂屋の煙突春の月
東京に春の積雪一センチ
六十年住めばふるさと沈丁花
三宝寺の弁天さまや残る鴨

東京 加 賀 葉 子

こんぺいとう一粒噛みて雛納め
伊那谷の芽吹の騒ぞめき広ごり来
シヤツを干す沈丁の庭薫り満つ
静かなる開かずの校門諸葛菜
腸活のにごり酒とや井月忌

東京 久 留 島 規 子

囀や谷戸の槌音追ひかけて
駅までを遠まはりして梅日和
ほんぼりは灯さじ春の雪ばうばう
白木瓜の枝張るままを活けにけり

早蕨のほどけ初むるや露地の雨

東京 下 嶽 孝 一

春立つや疊を日差し後ずさり
寒鯉の孤独の重さ水底に
馬鈴薯植う日時計となる山の影
搗くほどに色の鮮やか蓬餅
ものの芽の出揃ふ庭や昨夜の雨

東京 草間 三 香 子

対岸の草うつすらと春の雪
囀りやまろき姿の六地藏
閉ざされし弓道場や草青む
振り返り振り返る猫日脚伸ぶ
奪衣婆の膝の二円や梅日和

東京 岡 村 純 子

草萌や乳飲み子のまた大あくび
荒畑の土黒黒と春の雪
知らぬ間に庭の遠近よもぎ萌ゆ
今更と手習ひ始む春の夜
春障子客間となりし母の部屋

東京 桑原 優 美 子

静けさの重なつてゆく春の雪
頰杖の小さなあくび春炬燵
啓蟄や故人にもある誕生日
卒業子道いつばいに通る来る
永き日やめくり癖ある雑記帳

東京 三 村 紀 子

閉められしままの団子屋春寒し
バス停の椅子に毛氈桜時
供花に足す薄桃色やお中日
挨拶をして回る猫彼岸寺
亡き犬の掘りし穴の辺いぬふぐり

東京 小 池 清 晴

雛壇の鴨居に届く高さかな
薄紅のローストビーフ春兆す
山火事やほこりを被る龍吐水
梅匂ふ日に四便のバスを待つ
がらがらと揺るる風鐸揚雲雀

東京 一 由 久 美 子

虚子像の肩幅狭し牡丹の芽

雪解の光あつめてゐる梢
石組に長き尾の影蜥蜴出づ
焼けし跡残る石鉢春の水
段ボールの家に入ゐて桜かな

武蔵野

砂地 宏子

梅の香の満つる小路や昼下り
年ふりて母から吾へ雛納
春ひなた月曜の鵜の大あくび
囀がさへづりを追ふ朝かな
小流れへ子らの持ち来る落椿

立川

正田 華子

稿成りて旅にさ迷ふ春の夢
春愁や故郷米の握り飯
サスペンス映画観に行く町臈
陽炎や石垣長き館址
フェンス越え枝先一花の雪柳

町田

広瀬 俊雄

湧水にゆるるばかりや根白草
空暗しかたまりて落つ春の雪
畦道のうつすら白し花薺

丹沢の山襷深し今朝の雪
踏まれてもなほ美しき落椿

町田

桔梗 純

如月の星へ重ぬる人あまた
みどり濃き花菜へ胡麻の香りかな
雛の日の雨は雪へと変りけり
はだら雪屋根それぞれの紋様に
囀や幼の笑みに出合ふ朝

日野

喜多尾 明子

宅配の荷に二三片春の雪
昼風呂や霰は雪に変わりつつ
夜の底のしづけさ春の雪降り積む
園庭にポニー来てゐるうらけし
お不動の裏の沢音藪椿

横浜

西本 才子

湯気あがる蕎麦を供へし雛納む
金縷梅のそびらに続く雑木山
詣で終へ薬師の裏に梅見かな
棒を手に子等追ふ溝の赤蛙
山茱萸の花や野川の曲りたる

横浜 大橋 雅子

南伊豆黒き磯辺に春の波
満開の花のトンネル川に沿ひ
菜の花の迷路花粉にまみれけり
頭を上ぐる三桎の花ほのかな香
我が庭に鶯来る久久に

横浜 三木 豊子

リハビリの後の疲れや鳥曇
棧橋へ曳航の水脈春の風
ぼたん雪地に届かずに消えにけり
鶯鳴いて春光の磯旋回す
瓦斯灯の点る馬車道春の雪

横浜 星野 信子

居眠りの羅漢も居りて暖かし
湯気たてて産れし仔馬朝日差す
水底の陰に渦巻く蝌蚪の紐
おほる夜の闇に靴音吸はれけり
下ろし立てのスーツの張りや新社員

川崎 新妻 奎子

春雪や付け直しるる貝ボタン

富士晴れて裾野ゆるやか桃の花
螢烏賊腹ぶつくりと膨めり
意識無き母の寝息や沈丁花
紅絹をもて女雛の顔を拭ひをり

川崎 大久保 進

相席のベンチの間合ひ春浅し
水ぐるまざんざと廻る雨水かな
たこ焼きの匂ひはみ出す春の昼
八寸の先づは一箸木の芽和
校庭の隅の慰霊碑鳥帰る

鎌倉 恒川 清爾

春浅し早足で行く修業僧
手作りの雛いささか孫に似て
春昼や妻の眼鏡の下りたる
ひた走る高校球児木の芽道
ミイラ展出でて上野の早桜

伊勢原 佐藤 和子

どの道を行くも梅が香曾我の里
煙吐く海賊船や山笑ふ
くくたちの晴れ晴れと雨浴びてをり

犀川の風が冷たし犀星忌
菜種梅雨句帳の文字の滲みかな

静岡 大村 峰子

前山の膨む気配木の芽雨
師の通夜へ越ゆる峠を春の雪
鹿の角落ちて縄文土器の丘
犬の鼻引つ張つてゆく紋白蝶
蠅生る青き光の翅を持ち

静岡 海野 みち子

番鳩雪間の草を突きつつ
寒鴉村一番のアンテナに
曲りたる腰伸しては耕せり
近曾根同人を悼むかれしか木木芽吹く声聞きながら
レントゲン顔に当てられ春寒し

静岡 宮崎 知恵美

柚の家の垣に 百本風車
産土神へふぐり落しの夫行けり
落ち椿避けて掃きたる柚の家
梅白し峡の山には山の影
掌に受けて遊べり春の雪

静岡 望月 敏男
球審のアウトの拳春疾風
鋤の跡春をどつかと掘り起す

寒明の沼に映れる空の青
隣合ふ一山も又竹の秋
耕の土や足裏の沈みたる

静岡 藤原 千代子

剝ぐやうにシャツ脱ぐジョガー地虫出づ
先生も子等もどろんこ蘆の角
囀へ笠を向けたたり大師像
蘆若葉重機の嘴のよく動き
フェリー発つ霞隠れの伊豆の嶺

静岡 荻野 加壽子

初蝶の過去を持たざる軽さかな
一斉に眠る病窓春の月
春埃手配写真の古びけり
身につきし独り暮しや春炬燵
蛇穴を出で初ての息遣ひ
猫の子の早ジェラシーの声上ぐる

静岡 小川 明 美

捨てられし風呂桶春の水満つ
苗木植う鉛筆ほどの支柱もて
苗札にターザンとあり村しづか
直角に曲る木道水草生ふ
梅園の日当る処夫婦句碑

静岡 藤 本 節 子

スマッシュの一打に春を呼びにけり
紅梅へ試歩の一步を踏み出せり
七七忌雨上りたる朧の夜
強風にあふられ通し半仙戯
指先に紙の刃や冴返る

静岡 大 長 文 昭

故郷は水温みをり化石句碑
師の笑顔墓誌に浮べる四温※化石……村越化石(俳人)かな

猿の声峠に春の来りけり
大富士のぐいと顔出す達磨市
片仮名の花犇けり苗木市

静岡 加山 ひ さ 子

たまさかに見つけし四葉のクローバー

風除けを解き春の風身の内に
耕人に続く雀の家族かな
三姉妹揃はぬままや雛の日
口結び真つ直ぐ前を受験生

静岡 石 川 裕 子

混み合うてゐて静かなる梅見茶屋
古寺の東司に入るや春の蠅
廃材の隙より数多つくしんぼ
朧夜や行平鍋に卵炒り
花菜風裾にフリルのワンピース

静岡 本 多 ひ と み

花は葉に川面に影を落したり
山里の蛙合戦二重奏
鳩群るる駿府城趾の花盛り
移ろひの世に変らざり山桜
水草生ふ沼に細波生れけり

静岡 杉 澤 修

ミモザ咲くコンテナカフェのテラス席
荒東風に鳴るやハンゲル文字の絵馬
エルガーのチェロ曲春の月いびつ

リラ冷えや約束の無き日曜日
楓の芽鉄門錆ぶる閻魔堂

金沢 高田たみ子

師の句集^{句集「青嶺」}読みをり春の風硬し
射水 成瀬真紀子

足跡の大きくとけて春の雪
とろとろと記憶のかけら春の風邪
キリン舎へ春菜の籠を釣り上ぐる
花待たず逝きしと供花の桜かな

金沢 今越みち子

芹摘みし思ひ出の地よビル街に
紅白の能登の椿をもたらせり
大勢がスマホ撮りして梅に鳥
受験の日出世地蔵ののつぺらぼう
啓蟄や小さき抜け殻池に浮き

金沢 伊藤美音子

春を待つ蔵に眠れる備蓄米
舟を着け荷揚げの夫婦日脚伸ぶ
節穴をぬくる春日に力あり
打ち寄する波不揃ひや涅槃西風
白梅に一步近づき香の新た

括らるるままの芽吹きや雪柳
合格の胴上げはづみ花きぶし
水芸の像吹きあぐる春の水
あぢさゐのひつそり芽吹く裏参道
春の雪綾子の句碑に佇めり

金沢 豊田高子

しだれ梅千の蕾に日の雫
木の根明くじわじわ攻むる地の息吹
幽寂なひかり揉み合ふ山葵沢
蟻穴を出でましぐらの乳銀杏
蠶や切手はり足すエアメール

金沢 松井佐枝子

雪の果良太師『青嶺』緋けば
金婚の疾うに過ぎたり春炬燵
不揃ひの石置く堰やふきのたう
城垣に地震の爪痕雁帰る
さくさくと噛んで甘しや春キャベツ

金沢 石川純子

加賀富士の朝日に光る斑雪

よれよれや敗者めきたる恋の猫
雛飾る前を行き來の待合室
鳴き交す蛙顔出す山の池
剝落の火除地藏や春の蝶

金沢 河野尚子

鴨引きし水面微かな風の音
逝く人に見送る人に風花す
今年また減るてふ嶺の万年雪
神苑の絵馬揺す風梅香る
金縷梅の蕾解く風柔かし

金沢 道場啓子

緩やかに夕闇迫り春満月
春来る物干竿の雨滴
来し方を語りてふたり春深し
斑雪の道遠廻り碁会所へ
目鼻無き友の折りたる紙雛

金沢 杉本年虹

グラウンドにしるき靴跡はだら雪
逞しき女系や魚は氷に上り
春灯は能登復興の屋台かな
四つ割の積み上げらるる春キャベツ

仏壇の赤らふそくも彼岸かな

金沢 南恵子

浅春の駅に真白きピアノかな
陵へつづく古みち百千鳥
佐保姫へトランペットをひびかせて
貰ひたる仔猫ひと夜を鳴きとほす
遠き日や母と拾ひし桜貝

金沢 松下信子

野水仙一本瓶に緑茶汲む
玄関に並ぶ長靴春遅遅と
木の根明く村のそここ鳥の影
笹蕎麦へ割箸パキッ春浅し
亀鳴くやとんと出て来ぬ草木の名

金沢 北川禮子

流水の刺さる田畑や春の雪
冴返る蔵に杜氏の能登訛
白山の雪解を急す木偶の舞
梅ふふむ厄除け面を作る巫女
刺子さす雪解雫の音を聞き
荒るる日やふつくらと煮る味噌の豆

金沢 清水英理子

被災地に若き移住者草萌ゆる
珠洲焼の水琴窟や冴返る
春障子謡を復習ふ母の声
春愁や叔母の遺愛のマンドリン
うかれ猫地震の瓦礫を踏み外す

内通 塩井志津

不意打の停電長し春疾風
春遅遅と放出さるる備蓄米
餌を食む音かさこそと蚕棚
在りし日の温顔浮ぶ春の月
鴨引きて潟辺の木叢さやぐのみ
七尾 谷渡末枝

春耕のひと鍬ごとの重さかな
白湯美し忽ち積る牡丹雪
囀の始つてゐる神の杜
木の芽風ばらして運ぶ手織機
終の家壊す決意をして暮春
白山 加藤美栄子

寒紅をひいて謳へり「ろくでなし」
白山の巖を砕く雪解川

もつさう飯ほほばる導師山笑ふ
ままごとのあと置き去りにすみれ草
樵山の青むが合図わらび採

敦賀 倉谷ます美

吾の胸にささる余寒や良太師逝く
早春の雨の華ぐ人力車
畑小屋の戸の開きをり草青む
観音を祀る大巖はだら雪
播鉢に菜花の旨味整へり

敦賀 鶴田勝子

梅東風や城趾の古井水湧ける
鳴き交す二頭の子牛青き踏む
早春の宮に重る祈願絵馬
ばきばきと花菜の息吹摘みにけり
春の灯に昆布かく音浜通り

敦賀 中川雅月

客殿の螺鈿の茶器や梅ふふむ
潮の香の厨に満ちて若布汁
谷水に足を取られて斑雪かな
たつぷりや鶯餅の青黄粉
懷むかたかこの花師の句集

敦賀 中 村

優

犬ふぐり欧亜航路の鉄路鋪ぶ
野菜売り声を張りたる苗木市
乱流の渦へ渦へと流し雛
斑雪親子集むる滑り台
つえばまれ葉脈だけの春葉かな

敦賀 為永 香月 枝

焼鰯供ふ越路の初天神
春立つや味覚の育つ雛乳の児
海鳴りの音にひらくや洲浜草
あかときの斑雪の故山まぶしめり
梅ふふむ五湖に白雪遊ばせて

徳島 福 島 吉 美

引鳥のくぐるお堀の太鼓橋
味噌を盛る朱塗りの桶に日脚伸ぶ
竹鉄砲玉は紫紺の竜の玉
丸干しの針魚の揺るる伊根の宿
冴ゆる夜の廊下に響く鳩時計

徳島 村 上 和 義

伝承の写楽の墓に雪積る
天窓に張り付くごとく寒の月

ひたひたと棧橋揺す春の潮
分校の一人の歌ふ卒業歌
つぎつぎと大河を滑る春の鴨

徳島 宮 西 修 一

青天へ枝の交叉や梅真白
針箱に太き指貫針供養
下萌やひくひくとして犬の鼻
菜園に春の土掘る吾と犬と
ぼろぼろと鋤をこぼるる春の土

徳島 平 岡 功

この峠越ゆれば讃岐馬酔木咲く
潮風と海光宿す干鰯
春泥に靴をとられし女の子
路地裏の闇をつんざく猫の恋
ミモザ咲き教会の庭華げり

石井 木 内 マ ヤ

受験生リユックに学業守り下げ
紅梅にみくじを結ぶ受験の子
胎動の記憶をたどる入彼岸
うづまける雲の真中に春の月
とろみある墨の香りや彼岸寺

小松島 岡田 あゆみ

恋の猫肩いからせて帰りけり
境内に小さき土俵や鳥雲に
三角点印す山頂 冴返る
香煙を纏いて開く寺の梅
あたたかや檻のゴリラの大あくび

長崎 丸 本 祥 夫

静電気走る取つ手や冴返る
春鰯飛び立つ鳶の落したる
雨雲の千切れて去りぬ春夕焼
番小屋を砂の打つ音 春炬燵
白梅の寺へ石段 百八つ

西海 山下 敦 子

転びさうで転ばぬ二歳いぬふぐり
春めきて葉先の雫ミルク色
濡れながら野鳥飛び交ふ春の雨
山笑ふ小さき村に風車二基
春潮の潮止り待つ小舟かな
麗かや金網ごしに猪の顔
春一番大淀川に波立てり

宮崎 中山 宣

甌穴に落ち進む春の水
南洲書背に講話や風光る
日溜りに置かるるミシン 春日和

宮崎 中山 芳 教

遠近に二の字八の字つばくらめ
外灯の闇に消えたる 孕み猫
東郷の墨蹟雄雄し春立つ日
漆黒の西郷どん像や桜月
春淡し遣らずの雨にワイン干す

宮崎 鳥 居 達 史

鳥帰る放棄田一枚またふえて
本堂に園児の唱和木の芽張る
舟杭の朽ちて葦原角ぐめり
牧水像見遣る尾鈴嶺鳥雲に
春泥にまみれキヤツチャー 吼えにけり

那覇 中 本 清

如月の雨に抱き合ふ千羽鶴
あまたなる学徒の墓標つちふれり
一重草少女の跳べる忘れ潮
山羊の声風に従ふ遅日かな
礎石残る一の曲輪やうまごやし

※一重草……石尊(あそぎ)のこと

西原 宮城

勉

靴うらのいづこも柔ら青き踏む
うらうらと女童のむくゆで卵
目借時弛みては張る舳ひ綱
舳蹴りの広場も失せぬ春茜
春愁やあさぎの空の雲のすゑ

きり城 渡真利真澄

啓蟄や碑のみの龕屋跡
くるみ餅食うて睡魔や春の昼
※龕屋……骸を運ぶ奥を納める小屋

花過ぎの畳に広げ形見分け
鶴亀の色差し終ふる日永かな
ものの芽や綱つくろひの胡坐胼胝

ベルシ 鈴木波江

当てどなく街を歩けば春かなし
この花種蒔かむと土を買ひに出る
苑にあそぶ人声遠し路の臺
路の臺天ぷらにして酒少し
夜更しの空を鳴せり春嵐

特集
未来の結社は
どうなる？

横澤放川 石寒太 吉田千嘉子

加藤かな文 上田日差し

村上頼彦 西村麒麟

クラブ 俳句界NOW 上地安智

特集
鳥と動物の物語

○鳥を詠んだ俳句セレクション
大谷弘至 赤羽根めぐみ

○動物を詠んだ俳句セレクション
遠藤由樹子 松尾清隆

○エッセイ 鳥獣の句の魅力
坪内稔典 奥坂まや 北柳あぶみ

隔月連載

読者会
若手句集
を読む③

相子智恵
抜井諒一
堀田季何
(司会) 井上泰至

【注目の句集】

矢野景一『圭復』
丸山美沙夫『虎落笛』

連載陣 宮坂静生 青木亮人 栗林 浩坂 口島弘 ほか

「俳句界」投稿欄 一流選者11名！
充実の投句欄

※一部変更の可能性がございます。



株式会社 文芸の森

お求めは…●〒169-0075 東京都新宿区高田馬場2-1-2田島ビル8F
TEL.03-5292-9188 URL <http://www.bungak.com>

同人作品の佳句

江見悦子選

春 近 し 退 庁 の 空 縹 色
 口 曲 げ て 泣 い て を る な り 仕 丁 雛
 後 ろ 手 に 賢 治 来 さ う な 春 夕 焼
 水 ぬ る む 踏 め ば 揺 げ る 川 原 石
 鳥 帰 る 期 限 の 切 れ し パ ス ポ ー ト
 鳥 雲 に 過 客 に 紛 れ 師 は 旅 に
 古 雛 い つ も 遙 か を 見 て ゐ た り
 旅 立 ち の 荷 物 は ひ と つ 二 月 尽
 馬 鈴 薯 植 う 日 時 計 と な る 山 の 影
 夜 の 底 の し づ け さ 春 の 雪 降 り 積 む
 蛇 穴 を 出 で 初 て の 息 遣 ひ
 花 待 た ず 逝 き し と 供 花 の 桜 な
 荒 る る 日 や ふ つ く ら と 煮 る 味 噌 の 豆
 胎 動 の 記 憶 を た ど る 入 彼 岸
 靴 う ら の い づ こ も 柔 ら 青 き 踏 む

濱 谷 和 代
 高 橋 ひ ろ
 光 岡 れ い 子
 山 本 右 近
 大 内 佐 奈 枝
 三 屋 英 俊
 穂 苅 照 子
 藤 田 裕 子
 下 嶽 孝 一
 喜 多 尾 明 子
 荻 野 加 壽 子
 成 瀬 真 紀 子
 北 川 禮 子
 木 内 マ ヤ
 宮 城 勉

同人会だより

会長就任ご挨拶

この度、曾根満会長のご逝去に伴い、後任として同人会会長を命ぜられました金沢の中條睦子でございます。

今までは、副会長として務めてまいりましたことでもあり、僭越ながらお引き受けした次第でございます。

金沢では、平成15年の同人総会で滝沢伊代次主宰より任命され、初代同人会会長を中山純子先生が務めてられました。純子先生には、常に前向きに歩むことをお教え頂いてきましたことでもあり、今もこの大役を先生に背を押されているような気がいたします。

「万象」同人会規約によりますと「同人会は、万象俳句会主宰を補佐して万象俳句会の発展に寄与するとともに会員相互の研鑽、親睦を図ること」とあります。規約に従いこの大役を務めることが出来るか心配でございますが、今まで故曾根満会長が進めてこられたことを参考に、オンライン句会、中山純子記念俳句賞、「万象」誌での同人会だよりなどの継続、同人名簿の更新、同人の慶弔など今までの活動事例を参考にしながら、役員の皆様と協議のうえ、引き継いでゆきたく存じます。

なにぶん不慣れではございますが、「万象」発展のため誠心誠意努めてまいりたく存じます。一層のご指導、ご鞭撻をお願い申し上げます。

令和7年4月1日

中條睦子

4月の「万象」オンライン同人句会高ポイント

- | | | | | |
|-----------------|-----------------|----------------|------------------|---------------|
| 3 | 4 | 5 | 9 | 11 |
| 入学会員コサイランタンジェント | 能登に季のめぐり紅白葎椿 | 職退きてひと日の長き菜種梅雨 | 春潮や神の撒きたる鳥の数 | 二月堂火の粉に混じる春の雪 |
| 流れ着くものも加へて鳥の巣 | 忘るるは老いの知恵なり飛花落花 | 老人の小さく坐る花見かな | 八十路なほときめきのあり苗木植う | 消印の波の模様やうららけし |
| ランドセルけふ満開の花の庭 | 鉄瓶のたぎりてゐたり春の風邪 | 桑原優美子（東京） | 山本 右近（さいたま） | 荻野加壽子（静岡） |
| 抱卵の燕ひつそり醬油蔵 | 貝鉦きつちり嵌めて新社員 | 塗木 翠雲（四街道） | 神田美穂子（富士） | 成瀬真紀子（射水） |
| 撫山の青むが合図わらび採 | 小上がりに熱きおしほり花疲 | 大久保 進（川崎） | 宮西 修一（徳島） | 清水英理子（金沢） |
| 牛の産見守る少女初桜 | 明日は引く白鳥の子の嘴は黄に | 増田 幸子（佐野） | 砂地 宏子（武蔵野） | 三屋 英俊（佐倉） |
| 参道へ散華さんげと散る辛夷 | ぶらんこの二人浮雲蹴り競ひ | 三屋 英俊（佐倉） | 花の日日迎陵頻伽を聞かると | 三屋 英俊（佐倉） |

（*句頭の数字は点数を示しています）



今回も古今の佳句・名句に触れながら遊んでゆきましょう。空所に女偏、「女」部の漢字を入れてみましょう。

- 1 一家に遊ひとつ□もねたり萩と月 松尾芭蕉
- 2 蒲団着て寝たる□や東山 服部嵐雪
- 3 たとふれば独楽のはぢける□くなり 高濱虚子
- 4 □が君飢ゑの記憶の遠くあり 沢木欣一
- 5 白木樅□児も空を見ることあり 細見綾子
- 6 二日はや夫□膏藥貼り合へり 内海良太
- 7 寒晴やあはれ舞□の背の高き 飯島晴子
- 8 白□の菊の枕を縫ひ上げし 杉田久女
- 9 花影□□と踏むべくありぬ岨の月 原 石鼎
- 10 叱られて□は二階へ柚子の花 鷹羽狩行
- 11 河童忌の夜を稲□のほしいまま 飛高隆夫
- 12 平凡の二文字を□ひ髪洗ふ 黛 まどか

【正解】

- | | | | | | |
|----|---|---|---|---|---|
| 9 | 5 | 1 | 2 | 3 | 4 |
| 婆婆 | 嬰 | 女 | 姿 | 如 | 嫁 |
| 10 | 6 | 婦 | | | |
| 姉 | | | | | |
| 11 | 7 | 妓 | | | |
| 妻 | | | | | |
| 12 | 8 | 妙 | | | |
| 嫌 | | | | | |

おいしい俳句

第4回 嵐山光三郎

息ためて丸の南瓜に刃を入れぬ 柴崎悦子

南瓜の皮は厚くて、固く、ちよつとした岩石のようだ。油断して刃を入れると、切っている途中で止まってしまふ。研ぎたての包丁をあてて、無念無想、エイヤツと切る。スパーンと切れて二つに割れる。ざっくりと実がつまった美しい朱色の断面が姿をあらわします。

南瓜は、十六世紀ごろカンボジアから伝来したウリ科の一年生果菜。種を植えると黄色い花が咲き、蔓がどんどん伸びていく。アメリカや世界各地で栽培されるようになった。畑に種をまくと、太い茎がどんどん伸びて、葉をのばして南瓜の森になる。ジャングルの地雷みたいだが、おっかない気配はなく、食べてみると甘い。角切りした南瓜を鍋でコトコト煮て口に入れると、ほんわりとして上等の味がする。

武者小路実篤が描いた画賛に、南瓜と胡瓜きゅうりが並んでいて、「君は君 我は我也 されど仲よき」という名作があった。わが家の台所にある食堂の壁にこの画賛が飾っており、小学生ながら、「こういう仲もいいものだ」と考えていた。ころころと丸い南瓜を見ると、いつもそのことを思い出す。(令和六年「燕」第十一号)

公益団法人俳人協会

佳句佳句しかじか

同人作品鑑賞(四月号)

亀田やす子

雪に棲み雪の怖さも楽しさも 中鉢弘一

作者は札幌在住の方。時計台やポプラ並木を思い出す。美しい花、湖、湿原、山山も次々と浮かんでくる。雪による交通災害や転倒など、隣合わせの危険が怖いのである。「怖さも楽しさも」とリフレインして句の韻律を整え、座五の省略を読者に想像させる句である。

寒卵割る妻の手のしなやかに 森山 曉湖

細見綾子の句に「寒卵二つ置きたり相寄らず」がある。滋養分の豊富な寒卵を使つての奥様の手料理。かたわらにいる作者の視線は、卵を割る「妻の手」に向いている。卵を溶く姿までじつと見ていて「手のしなやかに」と描写したのである。仲睦まじいお二人の通い合う愛情を感じる。

読初の本に食み出すえびす紙 山本 右近

読初の本は邦楽の本かと勝手に想像した。「えびす紙」とは「紙を重ねて裁つ時、内へ折れ込んで裁ち残したもの」と「広辞苑」にある。福紙ともいう。縁起の良い本を手にしたのである。歌舞伎の台詞、「こいつは春から縁起がいいわいなあ」と言うところか。幸先の良いスタートである。

元日は追悼の日となりし能登 喜多恭仁子

作者は千葉在住の方。昨年の元日に発生した能登半島の大

地震からちょうど一年が経った。午後4時10分、多くの人が黙祷したことだろう。筆者もテレビの放映を観て黙祷した。「追悼の日となりし」の措辞に、以前の能登半島の姿が早く蘇って欲しいとの願いが籠っている。

むずむずと大樹を覚ます冬芽かな 穂刈 照子

広い公園の一面に、太くて大きな白木蓮の冬芽を見掛けた。周りの木の芽はまだ固い冬芽であったが、白木蓮の芽は丸みを帯びていた。この句の眼目は「大樹を覚ます」である。眼前に広がる数多の冬芽のひとつひとつに、「むずむず」のオノマトベが活動を促しているようだ。

いつの間に声変りせし年始の子 藤田 裕子

離れて暮らす家族の年始である。出迎えた作者。お孫さんの成長ぶりに驚いている表情が浮かぶ。変声期のしわがれ声の大人びた言葉に返す作者の言葉にも慎重さが窺える。「いつの間に」の表現に、お孫さんに対してさらなる成長を期待する気持が感じられる。

福耳にイヤホンを嵌め冬帽子 岡村 純子

縁起が良い福耳に嵌めたイヤホンから流れる好きな音楽を聴きながらの散歩なのか。「冬帽子」は作者手製の毛糸帽を想像する。かつて「耳」がテーマとなった「万象ノオト」に故小坂橋泰山氏の文章が載り「母親から福耳を授かった。年配の方に褒められた」と書かれていたのを思い出した。

獅子舞の泣く子にそと触れにけり 三村 紀子

獅子舞が出ている神社の祭りに家族で出かけたのだろう。抱かれて獅子舞を見ている子が急に泣き出した。獅子頭が怖

くなったのだ。獅子舞はその子に近づき、噛まずにそつと触れただけで立ち去った。「そつと触れ」で邪氣は払われ、無病息災のご利益がいただけたことだろう。

冬木の芽沖まで晴れて海平ら 西本才子

今年の正月は穏やかな気候で温暖化を感じた。横浜に住む作者は「万象」同人欄の投句者の中で最高齢である。

掲句は山下公園辺りで詠まれた句のようだ。家族の協力のもと横浜の海を眺め、「沖まで晴れて海平ら」と一氣に表現したところには、97歳にして若さがある。益益のご健吟を。

胡座無理 正座尚無理 冬座敷 大久保 進

漢字ばかりの句は詠めないものである。掲句をゆつくり読むことで成程と納得。膝を痛めて胡坐も正座も無理。「冬座敷」を座五に据え、漢字ばかりの句に仕立てたのは見事だ。阿波野青畝に「山又山 山桜又山桜」がある。桜どきに必ず口をついて出てくる句である。

正座して仏具みがけり 冬椿 織田みさゑ

新しい年を迎えるに当たりあれやこれやと清掃が始まる。この句は仏具みがきに焦点を絞っている。仏具の取扱いは力を抜いて紅色の紅絹で拭いたものだ。「正座して」に、亡き人を偲びながら丁寧に磨いている姿が浮かぶ。座敷から見ると紅色の冬椿が作者を見守っているようだ。

お元日アイロン掛くる 日章旗 望月敏男

最近、祝日に日の丸の旗を掲げる家庭が少なくなった。作者は丁寧に仕舞っておいた「日章旗」の畳み皺が気になったのだ。「アイロン掛くる」の措辞に几帳面な人柄を垣間見た

ように思った。ピンと張った日章旗を掲げ、しゃきつとした氣分で迎えた元日である。

嬰兒の放屁掌に享く初湯かな 谷渡末枝

赤ちゃんの初湯である。想像するのは作者に抱かれて氣持よく浴槽に浸かっている姿。むっちりした餅肌のかわいいお尻から、プツプツとおならをした赤ちゃん。支えていた掌の感触に、「よしよし」とお尻を撫でる幸せが滲み出ている。

初天神 幼子撫づる牛の尻 中村 優

菅原道真公を祀る天満宮への初詣である。伏した姿の撫で牛の姿は場所によつてそれぞれである。幼子が身の丈ほどの撫牛の尻のところを小さい手で一生懸命撫でている。無病息災や知恵を授ける縁起のよい牛の頭を撫でさせたいと、子供を抱き上げる親の姿を想像した。

補助輪を外す喜び 黄水仙 村上和義

補助輪を付け思うように乗り回していた自転車。いよいよ補助輪を外すことになり、乗っては倒れ倒れては乗りを繰り返して、あれよあれよと思っているうちにすんなり乗ってしまった子供の成長とその喜びが伝わってくる句である。庭の黄水仙も香を放って喜んでいようだ。

お隣も老人二人 枇杷の花 宮西修一

枇杷の花言葉は「温和・治癒・静かな想い」とある。花は地味であるが夏の実りが楽しみ。「お隣も老人二人」の表現が、現代の世相を地味でいっているようだ。隣同士は古くからの付き合いなのだろう。「遠くの親戚より近くの他人」と諺にある。いざというとき頼りになるのは隣人である。

芹の水

佐藤和子

福耳の布袋の膝下地虫出づ
上行寺 大西八洲雄先生の墓
 師の墓や赤くほぐるる牡丹の芽
 底浅き其角の井戸や椿落つ
 白木蓮のみるみる開く日和かな
 冢の槇のうねりや山笑ふ
太田道灌霊廟
 風鎮をわづかに揺し涅槃西風
 みなもとは雨降山よ芹の水
 やはらかき風のなすまま糸柳
 頭が見えて櫟大樹の鴉の巢
 囀やすずかけ去年の実を垂し



雨降山とも呼ばれ、伊勢原市のシンボルである大山。自然あふれるその麓を、俳句の材料探しを兼ねながら時時歩きます。大山を正面に見た阿夫利神社の二の鳥居近くに、其角の墓所・上行寺があります。墓前に「其角の井戸」が据えられ、古びた空井戸が時代を感じさせます。又、上行寺の程近くには冢とも呼ばれる太田道灌の墓・洞昌院があり、市内随一と言われる枝垂桜が見事です。これからも歩いて、見て、四季折折の大山を詠んでいきたいと思ひます。

螢狩 岡村純子

元氣よと母の声来る初電話
久かたの母の手細し螢狩
秋澄めり足音小さき母と行く
淡雪に透くる満月母逝けり
ふと側に母の気配や春の月
春障子客間となりし母の部屋
母逝きて文読み返す朧の夜
桐咲くや書込み多き母の辞書
母逝きて片手寂しや螢狩
霜の夜や母は絵本を読みくれし



「ありがとう」が、いつもの母の口癖だった。晩年は、役に立つうちにと、岩手の妹の所へ居を定めた。父の大病を乗り越え、働いた。世界を旅し、パソコンを習い、俳句を楽しみ、人との触れ合いが、好きだった。

トランプ遊びの後、床につき、亡くなった。

真宗の教えで、直ぐに浄土に行けると信じ、今頃はあちらの世界で、楽しく過ごしているのでは。

私も、これからの、長寿時代「素直」「好奇心」「感謝」を手本にしたい。

幼名

藤原千代子

御先祖は石工何某作り滝

「某」という文字を使った俳句に（夏芝居監物某出てすぐ死 小澤實）がある。庭の小流れに作られた小滝。なにかし「御先祖」は名も無き石職人だったという人物とこの滝との関わり、そこに物語を思い浮かべた。「石工何某」、おもしろい。

幼名で呼び合ひ秋の茶摘かな

「茶摘」と言えば八十八夜だとばかり思っていたが、茶所には「秋の茶摘」があることを教えられた。気心の知れた同士が作業を進める。そんな屈託のない愉し気な気分が伝わってくるのも、「幼名で呼び合ひ」という言葉の力だろう。

初獵の獲物を降ろす赤ら顔

11月半ばからの三か月が獵期となり、山野での鳥獸の捕獲が認められる。掲句はおそらく軽トラの荷台から降ろしたようだから獲物は大きい。「赤ら顔」が具体的な把握。大収穫に昂揚していたのか、ひよっとすると現場で既に祝杯を上げて来たのかもしれない。そんな想像もおもしろい。

風とらふ鷺の両翼初御空

「鷺」は猛禽類だが、「鷹」や「梟」と異なり、それ自体は季語にはない。広げた翼の風切羽を自在に使って風を捕らえ、ピーヒュルという鳴き声を響かせながら空の高みを舞う。季語に取合せた「初御空」が、のどやかで清らかで、真に気持のいい句に仕立てられた。

初しぐれ

売野 緑

箒目にしぐれ浸むるや古峯園

鹿沼市にある古峯神社と、その先にある広大な古峯園を吟行した作者。手入れの行き届いた庭園に立つ「箒目」が折からの「しぐれ」に濡れていたのだ。「しぐれ浸むるや」から、しっとりとした静かな雰囲気が見えられた。

四阿に女の声や瀬戸火鉢

前後の句の静寂を破るように、庭園の「四阿」から「女の声」が聞こえてきた。もちろん女は一人ではない。そこに置かれた「瀬戸火鉢」を開んでのお喋りが続いていたのだ。静かな句が並ぶ中であって、アクセントとして働いた一句。

神苑のピロートの苔しぐれたる

古峯園は「平泉にある毛越寺を思わせる」と作者が解説するように、あちこちらの地面が苔で覆われている。それを「ピロートの苔」と捉えている。しぐれの中で水滴に光る苔の庭。見立ての句は、「やうに」や「如く」などを使わずに、こんなふうに言い切ってみるといい。

夕しぐれ菅笠被り露天風呂

神社の近くには温泉もあるらしい。露天風呂で冷えた体を温めるのは作者だろうか。そこに「夕しぐれ」が振り込んで来る。そんなときには、宿が用意している「菅笠」の出番となるのだろう。見たモノを詠めばそこに実感が生まれて、俳句が生きてくる。

私のこの一句

行く年や地に震災の欠け瓦 中條睦子

昨年の元日の能登半島地震は、いまだ復興には程遠い、元旦のめでたさの覚めやらぬ間だった。激しい揺れに襲われ、金沢では震度5弱と報道された。すぐに見に行つた本堂は大丈夫だったが、境内にある墓地は数基のお墓が倒れていた。本堂の屋根の棟瓦が少し飛ばされていた。すぐに瓦屋に連絡したが、能登の被害が甚大で、秋も遅くに漸く修理してもらうことができた。年の暮境内の掃除をしていた時、小さな瓦の欠片が目飛び込んできた。ふとあの時の恐怖が胸をよぎった。

糸瓜忌の鳩の水飲むにはたづみ 渡真利真澄

24年も前の句である。催事で東京に滞在していた。催事が終わリ翌朝ホテルのラウンジで朝食を摂っていると、テレビ画面に米国同時テロの衝撃的なニュースが映った。凶悪なテロ。現実だろうか。愕然としたまま夕方の飛行機の時間まではと上野に行くと、改札を出た所で慌ただしく号外が配られていた。人人が方で号外を広げている中、昨夜の雨の名残であろうか、水溜りで番の鳩が一心に水を飲んでた。平和

な日本にほっとする。数日して句にする際、子規忌に近いことを思い季語を糸瓜忌とした。

多摩川にクジラの骨や葦の花 疋田華子

掲句は令和6年11月号の同人特別作品10句の内の一句です。地味な拙い句を、内海良太名誉主宰は「貴方の代表句としても良いです」と励ましてくださいました。誠に有り難いことです。感謝申し上げます。そして令和7年1月26日逝去され、言葉には言い表せない残念な気持ちと悲しみでいっぱいです。謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

クジラの骨が発見された川原では、バーベキューを楽しむ家族連れや野球少年の喚声上がり、長閑な光景です。

「気宇壮大に志を高く」一日を過ごそうと思っています。

大氷河なだるる夏の海青し 三好かほる

思いたってアラスカを船で旅した。

世界遺産の「グレイシャーベイ国立公園」で、船のデッキから、海に崩壊する氷壁と海面に映る氷河の景色を観ることが出来た。その氷河から氷塊が轟音をたてて崩れるのに驚いた。減速中の船も大きく揺れた。

見上げると天空は晴れて、その下の氷河は雄大であった。まのあたりに地球規模の大量を観た感動は、忘れがたい。

白い大氷河と夏の青い海の対比は美しかった。画帳にスケッチしたのも思い出である。

第七回 中山純子記念俳句賞 発表

正賞 白山に雪 伊藤美音子

正賞 極月の水 神田美穂子

準賞 白川郷 成瀬真紀子

佳作 おほばこの花 下嶽孝一

特別賞 初午 今越みち子

第七回中山純子記念俳句賞は審査の結果、右の通り
決定しました。



神田美穂子 氏



伊藤美音子 氏

万象俳句会
万象同人会

白山に雪

伊藤美音子

鮭のほる頃玉葱の苗植うる
鮭来るを日に温もれる石に坐し
川幅を余さず使ひ鮭の群れ
遡る鮭にまだらな赤き紋
堰越える鮭に声あぐ童どち
飛び跳ねる鮭のするどき眼かな
堰を越え鮭の大口息をつく
堰口に流れつきたる大根の葉
鮭の川ほとりに野鳥観察舎
凡兆碑真つ赤に熟す茨の実
川に沿ふ村や菊焚く匂ひして
尻を地にはち切れさうな種茄子
孵化場に人の出入りや暮の秋
鳶鴉浮遊の鮭を狙ひをり
白山に雪川底の鮭むくろ

受賞の言葉

伊藤美音子

中山純子先生に御指導、御教示をいただいた事を偲び、この賞には欠かさず応募してまいりました過去の句帳に書き溜めてあったものの中に健在であった夫と手取川へ鮭の遡上を数回見に行った時の句を、見つめ直し推敲致しました。

この頃はまだ鮭の遡上する数も相当ありましたが、近年は地球温暖化の影響もあってか、遡上の数も随分減少しているとの事です。

拙い作品に温かい評価をいただきました江見悦子主宰始めご選考に当たられた諸先生に心より御礼申し上げます。いろいろ配慮してくださった句友の皆様にも心より感謝致します。ありがとうございます。

極月の水

神田美穂子

コスモスのまだふれ合はぬ花の数
満身に朝日てらてら穴惑ひ
バイク馳す釣瓶落しをまつしぐら
鯉の群れ秋澄む水に朱を流す
相寄らぬままに明けたり二つ星
藪漕ぎや新穂揃ひし芒原
秋暑なほ五臓六腑へ朝の白湯
みづうみの芯に日のある小春かな
払暁や墨絵のごとき蓮の骨
枯葉踏む一步に樂の生まれけり
物書くに椅子に正座や着ぶくれて
白息が白息を追ふ通学路
ごを搔くや時雨過ぎたる松林
源流の苔に幼き氷柱かな
河岸洗ふ極月の水ぶちまけて

受賞の言葉

神田美穂子

かつて「風」の娘と言われた中山純子先生を顕彰する記念俳句賞を賜り誠にありがとうございます。ささやかな日常を、平明な言葉で詠んだ15句です。そのような作品に目を止め、評価して下さった選者の皆様に感謝申し上げます。

常常、地名や固有名詞に頼らず、一読景の見える句を目指しています。又作品を提出するにあたっては、誤字脱字、文語表現、送り仮名等日本語としての俳句の基本にも気を配るよう心掛けています。

現在は俳人協会等各種大会の募集に応募して自分の句を確かめつつ、俳句を楽しんでいます。

最後に私の俳句を理解し協力してくれる家族にも感謝しています。

準賞

白川郷

成瀬真紀子

小春日や白川郷へ橋渡る
足伝ふ吊橋の揺れ神無月
雨抱き山茶花ガラス細工めく
萱屋根を昨夜の時雨の雫かな
小さき木の小さき雪吊日を集む
合掌家床の艶這う寒さかな
おいの間に時を閉じ込め白障子
雪ばんば板戸の古ぶ外厠
冬菊の黄に土色の及びけり
萱束を冬青空へ吊り上ぐる
冬ぬくし屋根小走りに萱を葺く
遠方の一家駆けつけ雪囲
角材を運ぶ揃いのコートの子
冬紅葉向き揃ひたる合掌家
山城の木の葉天よりふるやうに

佳作

おほばこの花 下嶽孝一

初茜富士の稜線まぎれなし
秩父路に猪肉買ひし四日かな
七種や利根川土手の香の立ちぬ
建国祭乳房大きな土偶たち
梅の香や江ノ電停まる駅ごとに
亀泳ぐ啓蟄の水動かして
初蝶を見しは小湊誕生寺
楼門へ花の百段風まろし
草餅を搗くや広がる野の匂ひ
ビル光り柳青める日比谷濠
オーボエの川面這ひゆく目借時
測量の巻尺伸びる若草野
うららかや大声で行く国言葉
のどけしや小象曳くゆく稚児の列
敷石を割りおほばこの花出づる

特別賞

初午

今越みち子

如月や稲荷の轍立つ川辺
荒東風や稲荷の轍弓なりに
奥まりに稲荷の宮やねこやなぎ
三方を並べ初午支度かな
浅野川に初午太鼓ひびきたり
天つ日に稲荷鳥居の雪雫
雪薙稲荷鳥居の参道に
常夜燈の裾に熊笹春の雪
稲荷宮に合格の目の大達磨
春水の笈の音や池光る
春霞帽子に稲荷狐かな
春時雨ばつんと一つ出城の燈
お天神さんに痘の神あり斑雪
出城跡狼煙の松の雪しづる
春の夕日苔むす阿吽狐射す

選評

挑戦の姿勢を大切に

江見悦子

1位、「雛まつり」南恵子さん。冬から春にかけて、暮しの中の出来事とそれを取り巻く自然との関わりを、こまやかに詠んだ。季の変化を感性豊かに捉えたやわらかな詠みぶりに、魅力を感じた。15句の流れも自然で、気持ちよく読むことが出来た。

年少はみな羊役聖夜劇

雛の間へ鶯張りの廊下踏む

佐保姫のくすぐりてゐる猫の耳

2位、「海鷗」小池清晴さん。ダイビングの経験を生かした15句。自分の目で見、身体で感じた魚や海中のモノを平易に活写し、一つの世界を作り上げている。俳諧味のある数句も句群を引き立て、共感の得られる作品となった。

かんばちの目を吊上げて回遊す

敗戦忌漁礁となりし沈没船

3位、「白山に雪」伊藤美音子さん。万象賞に続いての受賞、おめでとうございます。川を遡って帰って来る鮭の生態と、その地の人人のたつきを取り合わせた意欲作。風土色豊かなテーマに題材を求めた姿勢も良かった。

遡る鮭にまだらな赤き紋

孵化場に人の出入りや暮の秋

神田美穂子さん、受賞おめでとうございます。一句一句が独立句として立ち上がり、個性的な作品群でした。

最後になりましたが、この3月で96歳になられた今越みち子さんが特別賞を受賞されました。俳句に寄せる情熱と精進に敬服しています。これからも俳句と共にある暮らしを楽しませて下さい。

品性のある句群

小林 愛子

先の見えない世の中、投句された方に敬意を表します。

1位「極月の水」 神田美穂子さん

身近な、見落としがちなところを救い上げて詠んでいる。

投句の作品の中では疵が少ないのもよかったと思った。

コスモスのまだふれ合はぬ花の数

みづうみの芯に日のある小春かな

2位「雛まつり」 南恵子さん

少年、少女による聖夜劇、雛まつりをを中心に纏められた

作品で、季節の風物とも調和がとれ、構想に工夫があった。

年少はみな羊役聖夜劇

落雁の蝶よ 藤よ 雛まつり

3位「白山に雪」 伊藤美音子さん

秋に川を上ってくる鮭と白山での生活を詠んで興味深い。

鮭の句は沢山詠まれているので視点を変える必要がある。

川幅を余さず使ひ鮭の群れ

鮭の川ほとりに野鳥観察舎

意欲ある作品に感動

福島 せいぎ

1位「オランダ坂」 入山繁幸さん

秋の長崎での旅吟。限られた時間内での句作は難しいがグラバー邸周辺の景色をていねいに写生している。

教会の窓や赤青黄の秋日

ベランダの柱に絡む秋の薔薇

さやけしやカピタン部屋の敷き畳

2位「検番界隈」 丸本祥夫さん

検番という珍しいモチーフに挑戦した意欲に惹かれた。検番の行事など色街の内側を描くとさらにもっと面白い作品になるだろう。

交番へ 検番よりの餅配

石橋に馬欠の海鼠秤売り

練炭を熾す 検番勝手口

3位「白川郷」 成瀬真紀子さん

世界遺産の白川郷の初冬の景を手馴れた手法でまとめている。よく推敲された作品から受ける印象は快いものがある。

小春日や白川郷へ橋渡る

雪ばんば板戸の古ぶ外厠

冬ぬくし屋根小走りに萱を葺く

6	6	5	4	3	2	1	順 位
雛まつり	海 朧	オランダ坂	おほばこの花	白 川 郷	極 月 の 水	白 山 に 雪	題 名
南 恵 子	小池清晴	入山繁幸	下嶽孝一	成瀬真紀子	神田美穂子	伊藤美音子	作者名 選者名
10	9			4	2	8	江 見 悦 子
9	6		5	2	10	8	小 林 愛 子
		10	5	8	6	7	福 島 せ い ぎ
5	1		4	6	8		柳 澤 宗 正
1	8	9	10	6	3	2	中 條 睦 子
2		1	4		9	7	沢 辺 た け し
	3	8	5	10		7	岡 本 敬 子
27	27	28	33	36	38	39	合 計

労作揃い

柳澤宗正

18編数回読み返し、最後は自分の感覚で順位を付けたが評価の難しさを毎回痛感している。今回応募数が大幅に減り残念だったが、句力向上のためこういう機会は活かしたい。

1位「冬鳥」 杉澤 修さん

13種類もの違った鳥を観察してそれぞれの特徴を捉えて冬の15句に仕上げていくのに感心し、その力量を評価した。

気風になりて鶺鴒つ込む沼の黙

矢となりて鶺鴒つ込む沼の黙

流木に乾く藻屑や群千鳥

2位「加賀富士」 高田たみ子さん

高齢者の個性的な句の表現がユニークで頂いた。

柚子湯して背筋しやきつと八十路なる

腰ぬかすほどの響きや冬雷

3位「極月の水」 神田美穂子さん

破綻が無く詩心のある佳句揃い。

みづうみの芯に日のある小春かな

枯葉踏む一步に樂の生まれけり

感性の新鮮

中條睦子

今年の応募数は18名に留まったが、選にあたり応募した皆様の意欲と熱意に感動した。

17	16	15	14	13	12	10	10	9	6
残雪の富士	色なき風	加賀富士	雛飾	初午	父祖の地	秋隣	ふうとふゆ	検番界隈	冬鳥
桔梗 純	松井佐枝子	高田たみ子	奥太雅	今越みち子	谷渡末枝	河野尚子	前田貴美子	丸本祥夫	杉澤修
1	6				5		7		3
			3			4	7		1
			1	2		4		9	3
		9			2	7		3	10
					4	5	7		
			8	3	5			6	10
	2			9	4	1		6	
1	8	9	12	14	20	21	21	24	27

1位、「おほはこの花」下嶽孝一さん。新年から春にかけての作品には固有名詞の散見が目立ったが、対象を捉える感性の新鮮さにひかれた。

建国祭乳房大きな土偶たち
 亀泳ぐ啓蟄の水動かして
 草餅を搗くや広ごる野の匂ひ
 など、自然体で柔らかな感性で捉えた作品からは、余白が広ってくる。

2位、「オランダ坂」入山繁幸さん。長崎での旅人の目を通しての作品に、写生の確かさ、作者の感動が伝わってくる。昼の虫オランダ坂の擦り減りて
 さやけしやカピタン部屋の敷き畳

作品の個性は作者の思い 沢辺たけし

1位「冬鳥」杉澤修さん。題名通り15句全てに鳥が入っており、冬鳥それぞれの生息を捉え生き生きと描かれている。

見失ふことなき距離を夫婦鴨
 夕影につぶてとなりぬ三十三才

2位「極月の水」神田美穂子さん。吟行句もあるのだろうが、身の周りの何気ない景を句にしているところに作者の技量を感じられる。

バイク馳す釣瓶落しをまつしぐら

白息が白息を追ふ通学路

3位「雛飾」奥太雅さん。春の句だけで纏めてあり、作者

のあたたかい眼差しも感じられる。ほのほのとした読後感があつた。

石垣を持たぬ城跡花青木
匂ひ立つ畦の蓬に染まる指

4位「白山に雪」伊藤美音子さん。川に鮭が来れば鮭が中心となる暮し。そして、河口から上流へ廻って鮭を追う臨場感が伝わってきた。

川幅を余さず使ひ鮭の群れ
白山に雪川底の鮭むくろ

5位「検番界限」丸本祥夫さん。検番のある海に近い街の景。1句目と15句目にある検番の句が作品全体を引き締めているように思えた。

交番へ検番よりの餅配
練炭を熾す検番勝手口

今回の応募18作品、その全てに作者の思いを感じました。

手堅い作品群

岡本敬子

18編と少ないながら「万象」ならではのモノに執した手堅い作品揃いで、甲乙つけ難かった。

1位「白川郷」成瀬真紀子さん

ドキュメンタリーカメラさながらに、橋を結界として白川郷へと入って行く導入部。カットが切り替わると、世界遺産である合掌造りの集落が現れる。萱屋根の雨雫。床の冷氣。雪ばんば。圧巻は萱を葺く場面だ。萱束を冬空へ吊り上げ、

屋根を小走りに走る人人の姿が活写された。

小春日や白川郷へ橋渡る

萱屋根を昨夜の時雨の雫かな
合掌家床の艶逼ふ寒さかな

萱束を冬青空へ吊り上ぐる
冬ぬくし屋根小走りに萱を葺く

2位 今越みち子さん

春水の寛の音や池光る

3位 入山繁幸さん

昼の虫オランダ坂の擦り減りて

4位 伊藤美音子さん

堰口に流れつきたる大根の葉

第七回 中山純子記念俳句賞に応募された方々

入山 繁幸

下嶽 孝一

杉澤 修

前田貴美子

松井佐枝子

高田たみ子

桔梗 純

南 恵子

伊藤美音子

神田美穂子

成瀬真紀子

今越みち子

石川 純子

丸本 祥夫

谷渡 末枝

奥 太雅

小池 清晴

河野 尚子

(以上18名 受付順)

*俳句作品の表記等については、選評への引用も含め、すべて応募作品にあるままを掲載しました。(編集部)

北から南から

富山県高岡市

富山 成瀬真紀子

皆様に富山県高岡市を紹介したい。高岡市は富山県の第2の都市。昨年元旦の能登半島地震で高岡市も海岸沿いに大きな被害を受けた。財政が厳しい中、復興に頑張っている。

【高岡市】今から405年前、加賀前田家二代目前田利長が築いた高岡城の城下町として開かれた。その際、7人の鋳物師を呼び寄せたことで銅や錫の鋳物の町として発展した。金屋町（鋳物の町）、山町筋（商家の蔵の町）が日本遺産に認定されている。

【奈良時代の国府】天平時代、高岡市伏木に国府が置かれていた。天平18年大伴家持が国府へ越中守として赴任。多くの歌を残した。

古草の厚さや国府の蛇苺 欣一

家持の「かからむとかねて知りせば越の海の有磯の波も見せましものを」から歌枕「有磯海」が生まれた。

早稲の香や分け入る右は有磯海 芭蕉

「雄神川紅にはふ少女らし葦附探ると瀬に立たすらし」と家持が詠んだ葦附の群生地を欣一は訪れている。

葦附を尋ねてかきつばた 欣一

*葦附……淡水に生える藍藻類・食用・庄川に自生

【高岡御車山祭】ユネスコ無形文化遺産の高岡御車山祭は1588年、豊臣秀吉が、後陽成天皇を聚楽第に迎え奉る際に使用した御所車を前田利家公が拝領し、1609年に前田利長公が高岡城を築く際に、町民に与えられたのが始まりと伝えられている。蒔絵の美しい豪華な御車山七基の揃い踏みが見どころ。秀吉の時代に触れ、その御所車が高岡にあるという不思議な歴史を感じたい。高岡は前田利長の施政が今に息づいている。

【国宝】高岡には国宝が二つある。小さな市に国宝が二つもあるのは全国的にも珍しい。一つは利長の菩提寺である「瑞龍寺」、もう一つは蓮如上人が開き浄土真宗の触頭として繁栄した「勝興寺」である。いずれも江戸建築の傑作だ。

唐破風の金の曲線雲雀東風 真紀子

【雨晴海岸】高岡駅から電車で約20分の場所にある雨晴海岸は、富山湾越しに3000メートル級の立山連峰を眺められる。家持は「立山に降り置ける雪を常夏に見れども飽かず神からならし」と詠んだ絶景スポットだ。

雪嶺ををんな指さす有磯海 内海良太

曾根 満氏を悼む

既報の通り、令和7年3月1日、「万象」同人会会長の重職にあった曾根満氏逝去の悲報に接しました。

「風」の時代から俳句に親しまれ、静岡に「お茶壺句会」を立ち上げられました。長く教職にあった氏にとって、後進の育成には何の躊躇いもなかったことと思われます。

「風」終刊後は「万象」創刊時より参加し、同人となるや静岡で積極的な活動を展開され、晩年には「万象」同人会会長としてその活動の幅を広げ、会員の裾野を広げることに精魂を傾けられました。その成果を楽しみにされていた矢先の出来事は、氏にとっても無念のことであつたろうと思います。ここに感謝と哀悼の意を表する次第です。

合掌

略歴



曾根 満

昭和17年1月1日 静岡県生まれ

平成3年「風」入会

平成14年「万象」入会

平成15年「万象」新人賞受賞 同人

令和3年 第3回中山純子記念俳句賞受賞「富士有情」

令和4年「万象」同人会会長就任

令和6年12月 『俳句の宙 2024 精選アンソロジー』

(本阿弥書店) 参加

令和7年3月1日 逝去 享年84

曾根 満 二十句

『俳句の宙 二〇二四 精選アンソロジー』より

編集部抄

出 唄 の 中 に 少 年 絵 筆 取 る
春 愁 や 魚 板 の 音 の 湿 り が ち
茶 摘 女 の 満 身 雨 を 弾 き け り
抱 擁 の 男 女 憲 法 記 念 の 日
万 緑 や 全 校 七 人 ホ ル ン 吹 く
白 杖 の 少 女 炎 暑 の バ ス 待 て り
大 西 日 居 残 り の 子 の 逆 上 が り
大 夕 焼 富 士 天 辺 に 終 り た る
満 月 へ の ほ り ゆ く な り 女 郎 蜘蛛
が ち や が ち や の 昼 鳴 く 畑 石 ば か り
T シ ャ ツ の 案 山 子 背 骨 の 透 き 通 る
こ の 村 は 人 に 会 は ね ど 赤 と ん ぼ
十 三 夜 寂 聴 の 句 に み そ か ご と
身 を 振 り 足 引 き 抜 け り 蓮 掘 夫
十 二 月 八 日 顔 出 す 潜 水 艦
枯 蓮 へ 重 た き 風 の 音 し た り
大 富 士 を 芯 に 雲 な き 初 御 空

初夢や火星旅行の切符買ふ
一番矢あたりさうらふ弓始
富士雪解太平洋へ走り出す
〔満点Ⅱ〕所収

俳句の種まきお疲れ様

神田美穂子

私が曾根さんと初めてお会いしたのは、平成7年6月浅場先生の自宅が会場の静岡青葉句会に参加した時だった。

数年後井川の句会に誘われ年に2回程参加することが3年続いた。JR静岡駅から車で井川迄2時間半の行程の途中で玉川の吊り橋、トイレ休憩の横沢、峠の展望台等吟行をしつつ休憩するのが定番だった。金縷梅、鳥兜、銀龍草、山菜萐、等今迄知らなかった花を道道教えていただき、鳥の声を聞き、時には猿や鹿に出会い、句材満載の刺激ある楽しい3時間余だった。井川湖の渡船で対岸に渡り仕留めた猪や鹿の解体に遭遇したり、そうそう海野みち子さんのご実家の井川メンバの工房も見学した。焼畑農業、稗蔵、砂金採り、神楽、やまめ祭全て初めての事ばかり。そして真面目で心温かい井川の方達と句座を共にできたのは、曾根さんが井川に俳句の種を蒔いたからこそと感謝している。ここ5年以上曾根さんは静岡市の市街地に俳句の種を蒔くことに懸命に力を注ぎ、句会を多く立ち上げられた。私達にも句会を立ち上げるよう叱咤激励されたこともあったが、私は富士の句会と季節風を守るのが精一杯だった。曾根さん、私は季節風と曾根さんの満点会の方達と句座を共にする日を待っています。

楽しい体験と思い出を沢山ありがとうございました。そして俳句の種まきお疲れさまでした。

「大丈夫かな」

大村峰子

曾根先生、そちらも花の盛りでしょうか。井川はよい季節になりました。

先生のご逝去の報せは「豆雛」に明かりを灯した時でした。早いご快癒を信じておりましたので驚きました。

先生との最後となりました句会は、昨年の11月21日でした。先生はいつもの様に片道60キロの山道を運転なさりおいで下さいました。途中途中では、きつと吟行を楽しまれたのでしよう。

又、先生は、その日の午後1時半より講演会の講師を務めることになっていました。その講演会とは、井川生涯学習交流館に於いて、井川やまなみ講座としてへかつて大井川に唯一かかつていた井川の橋」という題で井川の刎橋^{はなはし}についてのお話でした。この「刎橋の解明」は曾根先生のライフワークでもありました。珍しい話に住人が集まりました。その中に数名の幼児がいました。その幼児へ先生は「大丈夫かな」と優しく声を掛けられたのです。難しい内容に御免ねということだったのでしよう。この「大丈夫かな」は忘れません。

先生、長い間ご指導賜りありがとうございます。
先生のご冥福を心よりお祈り申し上げます。

合掌

子規と私 (五)

細見綾子

日本の俳句はいま外国へどんどん紹介されています。アメリカにもどこにも翻訳して出されることが流行っているそうです。俳句という短いものが、子規の言っている生命力に満ち、写真ができるものだから、この日本的なものに興味を持つんだらうと思うんです。ただ、何もないものだったら、十七音の切れ端だったら、何も魅力を感じたりしません。

二、三年前にカナダの映画監督をしている人が、私のところへやってきました。フィンドレーという人で、日本の海外との交流をする組織を通じて来たのですけれど、俳句について聞きたいと、何日も何日も訪ねて来られました。何で来たかという、カナダの奥さんたちからテレビで俳句についての番組を放映して欲しいと頼まれたというんですね。

で、俳句というのは、生活というものが非常に重きをなして、生活の詩がたくさんあるから、今日まで減びなかつたんだというような話をしました。

言葉だけのふわふわしたものでしたら、こんなに続けるはずはないけど、日本人の生活の中で俳句が詠まれているから、根強く根づいて減びないんだというようなことを言いましたら、私も買物をするのかと訊きますから、もちろんする、毎日の菜っぱを買ったり大根を買ったり、

私も毎日行くなって言いました。

そしたらびっくりして、じゃ、あなたが大根買ったり菜っぱ買ったりするところを写真に写してカナダへ持って行きたい。それをやってほしいと言うもんですから、私、八百屋に頼みまして、籠を提げて柿を買うところを見せようと、一生懸命やりましたが、あまり沢山のスタツフが来るんで、八百屋さんに迷惑で、私は本当に困ってしまいました。

その映画は、「俳句の瞬間」という題で、いま俳句文学館にあります。何か機会があったら見てください。海外と交流する作品の賞をもらいました。

フィンドレーという人は、その後も何回もうちへ来て、あなたに最後の質問をしたいと言ったんですね。：何かと訊いたら、俳句は外国で育つだろうかという質問でした。私も、こんな熱心な人が何度も来るんだから、嘘を言っても仕様がなくて、俳句は、外国では育たないんじゃないかと言いました。

それは私の正直な感想です。俳句は外国じゃ育たない。日本の風土の中じゃなけりや育たない。日本の風土や伝統の中にあってこそ、また、それに対しての日本人の理解があってこそ育つんで、外国では俳句なんかだめじゃないですかと言ったら、「ふうん」と言っていていましたけど、私、本当にそう思うんです。

(次号につづく)

『万葉集』にたずねる抒情の源流 ②

橋本 清

酒の名を 聖と負せし

古の 大きな聖の 言の宜しさ

(三・三三九)

表題歌のように、意味内容よりも韻律や声調によって喚起される音楽的な快感が抒情そのものとなっている例を、もう一つ挙げましょう。

大の浦の その長浜に 寄する波

ゆたけく君を 思ふこのころ (八・一六二五)

遠江の国守桜井王から、「九月のその初雁の便りにも思ふ心は聞こえ来ぬかも」(二六一四)という歌が届き、聖武天皇(在位七二四―七四九)がそれに答えた歌です。

初雁に事寄せてお便りがあるかと思っておりましたが、一向にございません。もしや私のことをお忘れではと、軽い恨みを込めて訴えて来たのに対し、いや、忘れたわけではなく、君のいる遠江の大の浦の、その長々と続く浜辺に押し寄せる波のように、ゆったりとした気持ちでこの頃は君のことを思っているのだと返しているのです。

いかにも悠揚迫らざる帝王の歌といった感じですが。この歌も深く穿鑿しなければならぬような格別な内容はありません。母音oの三連続で始まり、その四連続で結ばれる。

そして、中間には七個ものoが含まれている。この母音oの多用によるゆったりとした声調が、そのまま作者の心情そのものとなっているのを味わうだけでよい歌です。

後世の作品を例に挙げてみましょう。

住の江の岸による波よるさへや

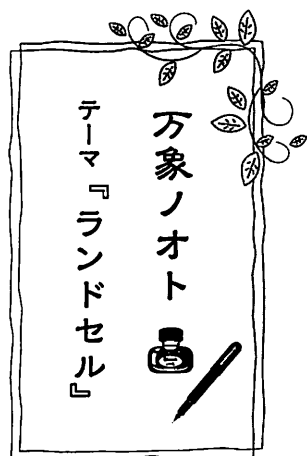
ゆめのかよひ路人目避くらむ (古今十二・五五九)

『古今和歌集』の藤原敏行の恋歌です。「百人一首」にも採られています。

住の江の岸に寄る波のヨルではないが、夜までもあのお方は夢の中の通り路で人目を避けているのだらうかということ。しかし、こんなふうに細かく読解しなくてもかまいません。訪れが途絶え、夢にさえも現れてくれない恋人への、切なくて、やるせなくて、たゆたうような恋心を、ヤユヨという柔らかな音の反復から感じ取ればよいのです。

石山の石より白し秋の風 (芭蕉)

『奥の細道』の旅の途次、加賀の那谷寺での作。この「石山」について、近江の石山寺であるとする説と、那谷寺の境内に灰白色の岩が多くあることから、それをもって石山と見立てたとする説と、二説あります。しかし、この句の場合、そんなことはどうでもよいでしょう。イシヤマノ イシヨリシロシ アキノカゼ、こうきつぱりと言いつ放った、その凛とした語音の響きに、秋風を感じ取ればよいのではないか。



臙脂色のランドセル

静岡 長谷川洋子

小学校入学前に父が買ってくれたランドセルは、6歳にしては落ち着いた臙脂色のものでした。まわりの子たちは朱色の明るいもので、なんだか他の人たちと違い過ぎているような気がしました。

子供の頃は大人しく目立ちたくなかったこともあり、積極的に使いませんでした。今なら、お洒落だった父が娘に似合いそうな色ものを選んでくれたと感じることができますが、当時の私には解りませんでした。それがいつまでも心のしこりになっています。

息子たちのランドセルは6年間使い終わり、思い出の傷を入れたミニラン

ドセルとして残してあります。そして、孫のランドセルは何回も合わせて一番似合うものを選んでもらいました。今年4月に入学しますので、きつと大切に使ってもらえることでしょう。

ランドセル

大阪 入山繁幸

私はランドセルで小学6年生まで通っていた。入学時はピカピカの黒色で形もしっかりして誇らしかった。それも6年生になると年季が入り、色褪せて形も凹んできて風格が出てきていた。友達が多くが6年生になるまでに、中学生が使う肩から提げる白いズックのバックに替えていた。中学生みたいで恰好良かったが、私はランドセルが好きで卒業まで使った。

今は黒や赤に加え淡い色彩のものもあって楽しそう。たまにリュックや他の軽いバッグで通学する子を見かけますが、私は古い人間だから違和感を覚える。重いというのが理由であれば中身の工夫も一考であろう。ロッカー設置や当日必要な教科書や用具のみを持参

させるなども含め、関係者の検討が必要だろう。

祖母の役目ランドセル

徳島 林 早苗

ランドセルは明治10年に学習院で初めて使われたそうです。背中に背負えて両手を空けることが出来、持ち運びに利便性の良い軍隊式の背嚢です。明治30年に学習院型ランドセルが一般化され、100年以上経過しても基本的なスタイルは変わっていません。

私の小学校入学時は戦争中でしたので、教科書などは母のお手製の布袋で通学していました。それに比べ今の時代は何と幸せなことでしょうか。孫、曾孫達は素敵なランドセルを背負っています。入学の半年前からデパートのランドセル売り場へ行き予約します。大きさ、形、軽さ、色などに迷いながら選びます。

支払いには祖母の私任せなので値段などお構いなし。ちなみに私には孫5人、曾孫9人……責任重大です。

ランドセル昨今

芳賀 福武幸子

幼稚園から帰ってきた息子が、「お母さん、勇君ランドセル買ったんだって」と、50年前の11月のことです。

翌年4月に小学校に入学するので、年内中には用意しなければと思ってはいましたが、息子に催促されて買うことになりました。身体が小さかったので重いランドセルを背負って学校まで30分も歩かなければならず心配しました。しかし、6年生になる頃には、重いランドセルを背負って歩くことで体力がついたのか、中学生に間違われる程に大きくなりました。

今、重いランドセルは成長期の子供にはよくないと、軽くカラフルなものが多く、一番人気は薄紫だそうです。入学の一年も前から揃えるようです。

残念なランドセルの思い出

静岡 高橋一夫

私のランドセルは叔父が入学祝に買ってくれたものでした。昭和25年、ま

だ日本中が貧しい頃のことです。

一学期の中頃のこと、同級生にふざけて追われ、ランドセルの端をつかまれ、背中に当たる要の所がガバツと取れてしまいました。母が丈夫な糸で修理してくれたのですが、二日程でまたも切れ、数回同じことを繰り返しましたが駄目でした。鞆屋に行き修理を依頼しましたが、修理不能ということで、新しい物を頼みましたが、入学時期も過ぎていて、ランドセルは手に入りませんでした。

近所の元兵隊の方から、軍の草色の肩掛けバッグをいただき小学校5年まで通学しました。大変悔しく残念な思い出です。最近のランドセルは色もカラフルで本当に丈夫そうです。

ランドセルを詠んだ句

富士 神田美穂子

菜の花やまだ空つぽのランドセル

この句は静岡の「季節風」で毎月句座を共にしているKさんの句で、俳人協会の全国俳句大会の入選句である。そして2019年3月朝日新聞の「天

声人語」に、近年のランドセル事情の話題の中で取り上げられた句である。

「いまはまだ包装をかけられて、中には何も入っていない時期だろう。入学はもう目の前。たちまち子どもたちの夢で満たされることであろう」とある。Kさんは現在88歳、96歳のご主人の介護をしながら毎月句会に新鮮な句を出し、私達は刺激をいただいている。俳句に関わって30余年、私はまだランドセルの句を一度も詠んでいない。空つぽのランドセル負ひ入学す

水原春郎
ランドセル吹き込む吾子の背に重く

稲畑汀子

「万象ノオト」投稿募集

▽10月号「ジャム」(6月末日締切)

▽11月号「葉」(7月末日締切)

▽長さ 本文 17字×19行以内

▽投稿先

〒417-0861 富士市広見東本町14-14

神田美穂子

巻頭作家（五月号）プロフィール



奥澤よし江^{おくざわ}
(市川)

奥澤よし江さんは昭和30年東金市に生まれ、36年に銚子市へ転居、高校卒業後に日本航空へ入社。運行管理部へ配属。教育訓練を受け運航管理技能検定の国家資格を取得。以来32年間自社の他、米国、ヨーロッパ、中近東、東南アジア、オセアニア、中国、ロシアからの外国社便や特別便、プライベートルート機、政府専用機等の運航業務を担い、各国のお国柄、文化などに触れ貴重な経験をされました。

平成18年日本航空を退職、二人の娘から手が離れたので前から関心のあった俳句、書道、後に詩吟を始め、また平成20年に日航俳句会に入会。其処で

平成27年に内海良太先生のお誘いを受け「万象」へ入会されました。

平成23年、日航俳句会で良太先生の特選に選ばれた記念の句は

鈴虫が一番星を光らしむ

俳句の原点は東金市松之郷の里山と九十九里浜で、風と遊ぶ自然児を自認するよし江さんで、今も変わらないとのこと。

「万象」誌、平成27年6月号に初掲載の句は

腰痛の和らげる今朝地虫出づ

山小屋は雪解凍の音の中
直近一年間の句歴を「万象」誌に探ってみると、「万象作品の佳句」として五句が入選し、その句は

屋根屋根の静かに眠る冬の月
砂の城しづかに崩す春の波
墨堤の風にひと息荷風の忌
奥入瀬の岩ことごとく滴れり
木簡の九九早見表秋ともし

四句選の掲載は令和6年8月号に

満山の葉桜の息さやぎ立つ
からつばの身に青麦の風吹けり
墨堤の風にひと息荷風の忌
薫風に目鼻を洗ふ仁王尊
そして今回めでたく令和7年5月号で巻頭に入選した四句は

掃き清め雪見障子を上げにけり
ひと挿しの水仙にけふ始まれり
枝先に広がる日脚春めけり

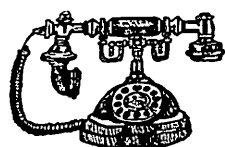
内海良太先生

かぎろひの奥の細道師は風に
今後の取り組みについて何うと、
「手探りで遠回りしながら俳句の道を歩いている中で、五七五への表現、言葉の力を考えるようになり、心が外へ向くようになりました。何気ない出会いや発見が俳句へつながることがあり、いつのまにか句作りが体幹のひとつになったように感じられます。俳句を続ける先にまだ見ぬ道が開けるように楽しみます。」とお話しされ、今後「万象」の若手として、大いに活躍を期待しています。

(奥 太雅)

万象作品

江見悦子選



○は佳句に選ばれました。

鳥帰る即身仏の塚の上 珠洲 井端久子

梅林を抜け来て白き美術館

○にはとりのくぐもるこゑや春の雪

をさな児の寝入れば春の灯を落す

吊橋を揺す子泣く子山笑ふ 小松島 田上幸子

○揭示板の合格さがす春シヨール

だみ声の響く朝市鱈買ふ

降り注ぐ海辺の光若布干す

寄れば去り去れば近づく炬燵猫 盛岡市 松井宣夫

町会の倉庫に並ぶ火事羽織

畑打てば大地も鳥も目覚めたる

○霜柱闇夜に大地持ち上ぐる

ゆつくりと運ぶ足許犬ふぐり 松戸 石川幸子

白蝶のあとより黄蝶バス停へ

春の雨土鳩ひたすら啄めり

○つばくらめ学習塾の軒を借り

○日溜りに猫の定席シクラメン 茅ヶ崎 久保田富士子

鳥雲に子等散り散りの夕の鐘

ひそやかに餌漁る鳩庭隼

「御自由にどうぞ」と櫛に花ミモザ

臘梅の小径ときをり風突る

柏

村田由美子

ミモザ咲き友のメールのはしやぎやう

札幌

竹重富子

霊園の真青な空を帰雁かな

鳥の声きらきら聞ゆ雪解道

春しぐれ埃のこして終りけり

雪解道ころびし子ども見る子ども

○春の風邪皿一枚の洗ひ物

ミモザの香降るふる眠る赤子にも

杉玉を吊し百年寒の水

金沢

松田好子

春うらら発酵バターの百均パン

冴えかへる風に剣の潜むごと

独活の香や石見銀山産と言ふ

道すぢを気儘に造り雪解水

雪割りの車連る国道沿ひ

土門 一平

○春泥を避けつつをどるスニーカー

猫の恋ぼろぼろになるダンボール

凍て風や白波立つる太平洋

札幌

石田 睦

早ばやと車庫の戸棚に雛飾

土門 一

日曜日朝からゆるり日向ぼこ

啓蟄や病める友よりライン来る

黒海苔のにぎり頬張る中学生

店先に葉物野菜や春の風

船橋 明美

武家屋敷の塀は黒黒余寒なほ

妻の背に顔を押しつけ猫の恋

春浅き田沢湖畔やたつこ像

湯につかり旅の終りは雪見酒

猫柳溪流巡る定山溪

ひな人形思ひ出たどり飾りつけ

志望校へ桜を待つて通ふ道

春寒し文学館のデスマスク

空家に人が戻つて冬夕焼

杉山 和廣

春を待つ十勝平野の花時計

春の雪考の墨絵に山頭火

バス停へ駆くる春泥蹴散して

願ひ乗せランタンのぼる冬の夜

杉山 鈴子

ひと月を降りて降り癖雪今宵

○冬空へ夜間飛行の音消ゆる

蒼然と樹影伸び行く雪野かな

ひよいと出て車道横切るきぎすかな

夕暮の低き木立に冬の月

風呂敷に包む湯たんぽ母偲ぶ

新庄

曾野部礼子

街中の庇繋る雪の屋根

ちぢかむ手懷に入れ雪作業

前向きに生きむと思ふ袖湯かな

大江

安藤桂花

日の光る枝をたわめて実南天

消えさうな靴跡ふたつ春の雪

手作りの宅配箱や梅真白

安藤桂花

小流れの落ち合ふ響き雪解光

春の日に照され笹のうねりかな

手水舎の屋根に雪解の音やさし

仙台

富田洋子

木の芽晴どよめく山の発電所

浜ごとに戸板を並べ海苔の市

春寒や膝に重たき大辞典

新潟

榊原キヨ子

菩提寺の松にずつしり牡丹雪

積み上ぐる雪の中より水の音

探梅や盲導犬の休む茶屋

齋藤 信

水温む少し濃くなる茶の香り

靴跡のそのまま残る春の土

日脚伸びる帰宅の部屋のほの明り

佐藤幸示

幾度も踏み固めたる雪の道

○紙漉の手の紅に変わりけり

節分会参道の雲只重し

新潟

本間悦子

寒明や薄日にくぐる遊歩道

水桶の隅に公魚寄りてをり

無我夢中山菜採りて杖忘る

山田季聰

啓蟄や仰天したる鳶の笛

米騒動よそに白鳥帰りけり

差別語をつい口にして余寒かな

燕

渡辺志ま

乾電池切れし時計や冴返る

道の駅にえのころやなぎ買ひにけり

山茶花の根元にまるく散りにけり

芳賀

稲川清子

とんがりて葉をおしのけて落のたう

水仙の花の咲き初む塀の下

凍雲を崩さず纏ふ男体山

福武幸子

○春の土箒に馴染むかるき音

文机のひと間明るし春障子

杉の枝落ちやせぬかと春一番

鹿沼

渡辺利子

友と行く節分草に出合ふ山

はつべたもゴム風船もふくらめり

はだれ野を過る国道薄日さす 栃木 飯塚キミ

下校チャイム耕す土の黒ぐろと

○啓蟄やファイバースコープ胃の中へ 佐野 仲山さよ子

まんさくの黄のあふれたる古墳跡

春光や御苑を雀自在なる 佐野 仲山さよ子

○野焼あと光るごみ虫石の下

ゆりの木の落雷の跡余寒かな

○梢より芽吹く柳の一直線 義本美智江

猫のつそりふらここ垂るる大櫓

愛犬の逝きて五年や日脚伸ぶ 志木 汐見克彦

盆栽の紅梅かをる会議室

春一番指で髪梳く女学生

春光や少女巧みに一輪車

暖かや婆の面会孫四人 森山洋之助

のどけしや介護タクシー待つ夫婦

師の去りて淋しき春や空仰ぐ 新座 多田英治

○落椿拾ひ集むる妻の居て

一眠り二眠りもす春の昼

縄のれん春満月の昇るころ 千葉 高田みや子

啓蟄やグラント均す球児達

春寒や貨車連結の高音響

早春や小川の底のうごめける 酒々井 小林あけみ

ピザ窯の炎のゆらぎ山笑ふ

鶏鳴の細き里山春浅し

形見の鋸ねんごろに引く遅日かな 佐倉 新谷八郎

探梅や相性の良き犬に会ふ

家元の賑やかな声迎春花

木村屋の餡パン旨し春立つ日 有泉正夫

梅の香や鼻の蠢く羅漢さま

あたたかや良太師描く二上山

初場所や優勝決むる巴戦 杉田富美代

雑市にあれこれ迷ふ老夫婦

咲き満つる椿の枝を花入れに

○梅含む志功天女の頬の紅 鈴木隆久

蜂蜜のざらつく寒九の厨かな

師の文字に滲む人柄あたたかし

春雷やハート広ぐるラテアート 鈴木美根子

落研の高座爆笑春を呼ぶ

割烹着の母の匂ひや梅一輪

野に山にベールのごとき春霞 立原千代子

河津桜薄紅の風起しけり
路の芽の地をぬきん出てうすみどり

水仙の一輪挿しの物足らぬ

聞き上手な友のありけり春夕べ

日向ほこ胸の中まであたたまり

亡き夫の木の芽田楽好みたる

風鈴のやさしき音や昼下り

しばらくは桜吹雪にたたずめり

悲しさや空き家の梅の見事なる

白梅に一羽の雀来てゐたり

昭和百年八十となり春惜しむ

春の鳥観察小屋の窓小さき

まがりゆく二輛電車や春の音

古神籤はづす作務衣や春浅き

恙く八十路に入るや梅の花

早朝の太極拳や着ぶくれて

梅林の仄かに香る紅と白

老幹や残る一枝に梅満つる

湧水の砂まき上ぐる春の堰

茅葺き門までの急坂梅薫る

佐倉 米田敏子

船橋 近藤澄子

山口秀吉

柏 鹿毛満子

松戸 菊岡緋路

寿多映子

目覚しのモリコーネの音梅ひらく
春光や花舗の表の鉢増ゆる

連山の上の春雲ティータム

日向ほこ思ひ出ひとつづつ辿り

新宿の街に紛れて冬ぬくし

路地奥の小さき社の梅早し

剪定を終へ口すすぐ風そよと

○ふくらみに力溜めゐる落のたう

真つ新な風にももの芽動き出す

大寺の石臼塚に蛸蛸の紐

青空に山茱萸の花黄の弾む

銀色の棘うるはしき薔薇の園

病み上がり豆撒きて邪氣払ひたる

花束や陸前からの春便り

水仙の一輪咲ける垣根かな

面会のホームの庭に梅ひらく

統廃合決る学舎卒業す

彼岸会の法話に混る鳥の声

葺き屋根を滑りて雪の跳ねゐたり

トランプの良き札めぐり暖かし

松戸

渡部洋子

市川 奥澤よし江

東京 安藤美酒々

蕪木静子

北口富栄

齊藤孝夫

黒猫の雪見障子に背伸びして

桃の花売る青年の少女めく

東京

高野翠子

風花や恩師の俳句書く日課

○春の雪万年筆にインク接ぐ

枯芝の上に野良猫毛づくろひ

東京

前川 昇

○包装の熟練の指春動く

片隅の実生の枇杷の咲きぬたり

春の雪皆せかせかと繁華街

鉢植ゑの花の待たるる春時雨

○たつぷりと小朝の嘶春夕べ

梅の香に埋るる湯島天満宮

白梅の閉校式や雨呼んで

臘梅の咲けるを待たず香りたり

ビルの谷クレイン揺るる春一番

木洩れ日の光ゆれたる春浅し

軽やかに風となり行く春の服

大水柱見て来し十指火にかざし

白菜のリュックの丸み家苞に

春疾風黒煙続く朝となり

寒波来てランナー達の息あがる

緊がれし犬の欠伸や息白く

校庭に一番乗りの梅見かな

鶴田智美

中澤桃子

橋本紀代子

長谷川信也

長谷川はるみ

平子甲奈

梅の香に鼻くすぐられ午前様

宮崎正義

○針供養祖母の針箱開かぬまま

幼児の駆けよる先の沈丁花

春出水後ろ手太き消防士

調布

荒井 仁

ハモニカの音渡り来る春の橋

梅日和パン屋の昼に列長く

湯疲れの耳に波音冬青草

三鷹

高尾早弓

○世の音を隔てて白き冬牡丹

番屋街朝より鯽を炊いてをり

懐しき友と肩抱く冬桜

南場雅子

しだれ梅祈願の絵馬の上に咲く

牛の顔手足も撫でて梅の花

穂の芽に光集る雑木道

府中

竹村晃子

春雪や工事トラック忙しく

手作りの蒔味噌夕餉彩りて

踏絵守る島や吊橋揺れ通し 日野 松原悦子

春の水夫婦の岩の間流る

雪解川黒部の里をきらきらと

焼葱の匂ひ道まで溢れたる 青梅 横井一美

兄弟に法事の知らせ日脚伸ぶ

冬ざるる売地の幟はためきて

臘梅を見やる丹塗りの太鼓橋 横浜 大駒泰子

雀らの口に合はぬか追雛豆

白梅と紅梅香る旧庄屋

風光る竹の葉擦れのさやさと 岡 元枝

○ミモザ咲く明るき庭の幼稚園

雛の舟波間に遠く曳かれゆく

満開の白梅の上丸き月 加藤 和子

黄沙色昨夜吹き荒れし北の空

大喧深夜の道路工事かな

○香煙の烟る師の墓紅椿 坂本 具子

春蜜柑うれい坂に轆轤ぐ

一村を梅が香包む曾我の里

校庭の応援の声運動会 柴田 雅春

枝ぶりのよき金木犀満開に

期日前投票すまます秋の暮

笛の音の空へ響くや初天神 横浜 長野高朋

追羽根の母子の笑顔空青し

左義長の火中^{はな}に紙の巻き上る

息苦し不安のつる寒戻り 森 桂子

しづかなる病の床や黄水仙

梅の里ふと耳にする加賀訛

真青な空に白梅枝伸す 豊 美佐子

連翹の天辺咲いて黄鮮やか

真白な小さき五弁や雪柳 川崎 横山ユキ子

数独の婆の居眠る春炬燵 伊勢原 山本カツ子

見上ぐれば礎の人びと陽炎へる

影薄きミモザの花の盛りかな 伊勢原 山本カツ子

なやらひの果て拝殿に鳩の群れ

春めくや夫に供ふるカップ酒

○敷藁へ日差し柔らか梅の里 松田 古谷悠紀子

小田原の海少し見え梅日和

○人声の湧く溪流や梅真白

津軽塗の母の器に雛あられ

枝払ふ寺男の背桜東風 静岡 飯田優子

うらけし抱かるる稚の頭の産毛

春昼の交す日本酒「麗人」てふ

組板は打楽器となり春キャベツ

穂の芽の真青なる空突きをり

早春や沼べりはただ鳥の声

国会の対立止まぬ紀元節

揺れの増す二月の道路工事かな

残雪の剣ヶ峰行く救助隊

薄氷に小石を二つ載せてみる

磐座に弦の響きや春田打つ

山焼の煤を手を受く天城山

義元の墓に音なく春の雨

○師の棺春花納め見送りぬ

山寺の苔むす庭や春の月

枝枝を鳥鳴き渡る春の沼

シエバードの後追ひ駆くる春セーター

誕生日に届くや赤きシクラメン

丸子路のアトリエに来る四十雀

紙風船そつと押し上ぐ婆と児と

学舎へ花束にしてスキートピー

静岡 伊東文恵

海野俊彦

杉田義則

杉山千鶴子

杉山巳代

高井明子

梅園へあふるる海の照り返し

海と空青さを競ふ建国日

初桜東照宮の登り口

卒業子の「はい」響きたる体育館

遠足の母の海苔巻酢の甘き

厄除けへ杉花粉舞ふ女坂

検針婦路地に狸と出会せり

波板に長さまちまち氷柱垂る

二人居の夜の豆撒の声小さき

山門を一步入りたる淑気かな

七草粥口に嬰兒のお食ひ初め

氏神の黒き鳥居の牛蒡注連

枯庭や緑青を吹く鎖樋

山の端の立木の尖り冴返る

独り居の玻璃戸を叩く春時雨

稜線を縁取るごとく春夕焼

糠床を回す指先凍返る

漆喰の壁へやはらか雪明り

煙立つ杉の花粉やバスを待つ

桜待つ今日もひとりの散歩かな

静岡 高橋一夫

田中秀幸

筑地裕子

内藤允昭

中澤祐一

永田公香

野崎浩子

円描き鳥舞ふ如く春の雪

水草生ふ沼面に朝日零れたる

静岡

長谷川洋子

収穫の野菜の穴に犬ふぐり

春めくや飛行機雲の交りて

遺跡田や田螺の描く十文字

松永博子

水草生ふ沼面の光吸ひながら

沼渡るしろがねの水脈春の鴨

呼び声の間延びしてゐる焼諸屋

矢野喜久江

山茶花や垣に残れる花ひとつ

目借時ゆつくり走るひかり号

藪椿そぼふる雨につやめけり

焼津

小梁洋子

大空を見上ぐる癖や桜草

ランドセルの色とりどりやつくしんば

掛川

鈴木美由紀

畑焼の煙漂ふ停留所

残る鴨よどみに二羽の寄り添へり

古の集落跡や梅ま白

川崎

鈴木裕一

涅槃会の木魚の連打山震ふ

島田鬚結ひ芸妓らの針供養

起き抜けの喉の痛みや葛湯吹く

金沢

上野富貴子

菜の花や母直伝の芥子味噌

コーラスに出ておいでよと桜餅

訪ね来し友と楽しむ雛あられ

金沢

北野陽子

雪とけて校庭に子らいつぱいに

高高と届かぬところ梅の花

淡雪や猫の足跡家に沿ひ

ヴィオロンの調べ軽やか春の川

信号に雪の学童雪の旗

新出祐子

蔵窓に瞬く星や寒造

○真鍮のドアノブ軋み冴返る

暖炉燃ゆ紅茶に二滴ウイスキー

竜の玉熊手を抜けて弾けたり

田上なつ子

○揚浜の錆びし大釜冴返る

熊笹の香をまとひたり春の雪

初買は赤き表紙の日記帳

廣田宏美

ガラス戸をゆさぶり屋根の雪しづる

空手道帯を新たに初稽古

祖母作る木目込雛を飾りたり

宮崎恵美

早朝の雪突く音や城下町

上流の雪の山稜くつきりと

幸先の良き元旦や日本晴れ かほく 能任康子

青空に背中押されて受験生

寒晴や玻璃戸の曇り磨きたる

春三日月櫺の天辺照しをり 白山 朝倉みゆき

下萌に目止め足止め風そよと

夕暮の庭先駆くる私たちの子

蘆牙やさざ波溜めて水底に 鶴尾正江

星明り木偶の廻せる文弥節

雪吊の逆さに池に映りたる

五湖の辺の風やはらかや梅ふふむ 敦賀 川口和代

山壁に斑雪のひかり幾重にも

走り根につまづく山路草青む

登りきて砲台跡や春の海 徳島 林 早苗

風の川腹すれすれに冬鷗

青空へ飛び立つかまへ寒鴉

新雪や眉山たちまち隠れたる 山本晴美

両国橋やうやく開く寒桜

白木瓜の小さき苔の開く待つ

春立つや少しお洒落な靴を履く 山本瑤子

水仙や波の飛び散る東尋坊

色の無き庭に一輪迎春花

牡丹雪次の電車を待つ二分 松山 入河大河

梅東風や句は引き算と言ひ残し

臘梅の匂ひの甘さ飴のやう 福岡 園田清子

差入れは菓子と一筆梅の花

好きな色気の向くままに毛糸編む

美しき八十歳や冬の葬 鶴田輝代

若草食む子象の鼻のリズム良し

春キャベツの固きはばいと手長猿

梅が香やオランウータン胡坐かく 太宰府 美山留唯

オペラ座の土産のチャーム六花

屠蘇祝ふ酒器は輪島の夫婦鶴

春待つやジャズを聴きつつおさんどん 那珂川 高山ひさ子

引出しの四隅の余白春きざす

足場解け真白の壁や風光る

絵手紙の切手切り抜く春炬燵 門川 請関ゆかり

春雨や煙草の匂ふ喫茶店

祖父の髭思ひ出しけり雛人形

仏前に母の好みし桜餅

冴ゆる星あまた大樹の枝の間 国富 山口孝治

竹笛のアンデスの歌冬木立
小さき手の陽にかざしたる薄氷
髪を切り背を伸して卒業子

那覇

稲嶺有晃

つぶあんの餡ばん春の夢の中

春天をつらぬく一打大太鼓

首里森の鳥語明るき二月かな

大城末治

百年の芽吹きの大樹村産井

春雨や御獄ツクキの苔の膨める

角店の早き灯や鳥雲に

辺野喜宝来

沖津風うららペアーのスニーカー

風尖ることもありけり石蓴摘

朝東風へ仏間の窓を開きけり

沖縄

高嶺谷道

忌日とて春菜を提げて友来る

坂上の病院通ひ春の風

年用意まづは仏間を拭き浄め

玉城玉常

寒鴉暮れゆく空を一羽つつ

○甘蔗時雨石敢當へ石獅子へ

うららかや鶏は尾を凜と立て

宜野湾

宜野 顕

春昼や赤き鶏冠トウキョウの放たるる

○春灯へ展示の刳舟帆カフネをあげて

凍雪の古橋そぞろに歩きけり
クロツカス空に大きく口開けて
引鶴の声のみ落ち来天深き

ベルン

森尾

舞



第二十三回「万象」新人賞速報

第二十三回「万象」新人賞が次の方に決まりました。

松永 博子（静岡）

万象俳句会

*詳細は8月号に掲載致します。

万象作品の佳句

江見悦子

にはとりのくぐもるこゑや春の雪 珠洲 井端久子

弥生時代に日本にやって来た鶏は、夜明けを告げる鳥として大切にされ、人間の営みに寄り添って来た。今では貴重なたんばく源としても毎日の暮しに欠かせない。この句、「にはとりのくぐもるこゑ」が「春の雪」との取合せで、存在感を増した。冬の雪の厳しさと異なり、寒気の緩んだ気配のある春の雪の懐かしさと通い合っている。感覚的な句。

掲示板の合格さがす春シヨール 小松島 田上幸子

2月3月は受験シーズン、合格の番号を記した掲示板には様々な思いを持つ人が多いだろう。発表を待つのは中学生か高校生か、紺や黒の制服の中で、付き添って来た母親の「春シヨール」が目を引く。受験票を手に掲示板に目を凝らす本人と母親。周囲は、合格通知を受け取りに受付に向かう姿、項垂れて校門を出て行く姿、悲喜交々である。省略の効いた、実感のこもった句となった。

霜柱閣夜に大地持ち上ぐる 蔵持山 松井宣夫

朝早く目にした霜柱を、夜の間に大地を持ち上げて出来たものと感じた。「閣夜」の黒と、朝日に輝く霜柱の銀の対比が明らか。霜柱が出来上がっていく様を、動画で見ているような臨場感がある。霜柱を擬人化したスケールの大きな句。

つばくらめ学習塾の軒を借り 松戸 石川幸子

「学習塾」という表現から、木造の古びた日本家屋に、小学生や中学生が連れ立って通ってくる場面を想像した。その軒に燕が泥を運んで巣を作り始めた。子燕が誕生して巣を飛び立つまで、元気で賑やかな時が流れるに違いない。生き生きとした場面を詠んだこの句に、綾子先生の句を思った。

つばめ／＼泥が好きなる燕かな(桃は八重) 所収

日溜りに猫の定席シクラメン 茅ヶ崎 久保田幸士子

春の日がうらうらと照る日溜りが、飼っている猫のいつもの居場所である。寒がりでもまた暑がりの猫は、快適に過ごせる場所を見つける能力に長けているらしい。縁側にはシクラメンが揃って花を上げている。穏やかな午後の情景を詠んだ。

春の風邪皿一枚の洗ひ物 柏 村田由美子

油断してうっかりひいてしまった春の風邪、案外と治りが遅い。薬を飲む為にも食事をしない訳にはいかず、冷蔵庫に残る食材で夕食を済ませた。終わってみれば今夜の洗い物は皿が一枚。これでもいいんだわと、ほっとするような気が抜けたような気分。日常の隙間に感じたおかしみのある句。

春泥を避けつつをどるスニーカー 金沢 松田好子

この頃は年齢に関係なく、スニーカーを履く人が目立つ。お洒落なスニーカーも多い。この句、「をどる」が面白い。目の前に伸びる春泥の道をあちらこちらと跳んで、春泥を避けながら軽やかに渡っていく若者。春泥を楽しんでるようだ。焦点を「スニーカー」に絞った、季節感あふれる句。

紙漉の手の紅に変わりけり 新潟 佐藤幸示

冬の季語「紙漉」は和紙を漉くこと、また紙を漉く人のことをいう。原料となる楮や三桠を栽培するところから始まる伝統的な和紙作りは人手を必要とし、年間を通じて重労働だ。作者は、一連の作業の中で漉く人の手に注目した。出来上がった混合液を簀の上に揺すって紙にする場面では、素手で漉くうちに手が真っ赤になる。それを「紅に変わりけり」と詠嘆の助動詞「けり」を使って表現した。すっきりした表現に、労働の厳しさに対する作者の共感の念を思う。

梅含む志功天女の頬の紅 佐倉 鈴木隆久

「志功天女」とは、「世界のムナカタ」と呼ばれた版画家棟方志功が好んだ題材。志功の彩色板画には、天平時代の典型的な美人とされた、豊満で色白の裸婦や菩薩があざやかに描かれている。頬には紅が華やかだ。梅の蕾が、志功の女性礼賛にふさわしい。

ふくらみに力溜めある落のたう 市川 奥澤よし江

早春、落の莖をみつける喜びにまさるものはないと思う。薄緑の擬宝珠のかたちの苞には蕾がぎっしり。それを「ふくらみに力溜めある」と的確に素直に表現したところに感心した。写生の骨法を会得している句。

針供養祖母の針箱開かぬまま 東京 宮崎正義

作者が男性と知って驚いた。故郷の家には祖母が残した針箱が残っているのだ。和服で通した祖母が健在だった頃は、いつも手近な場所に針箱が置かれ、日常の繕い物や、各季節

に備えて夏には浴衣、冬には半纏や丹前が縫われたものだった。今はだれもその木製の針箱を開けることはない。針供養の日（2月8日）に昔の暮しを思い出している作者、俳句は「なつかしみの文芸」でもある。

世の音を隔てて白き冬牡丹 三鷹 高尾早弓

春、若い蕾を摘み取って花期を遅らせ、12月から1月にかけて開花させるようにした牡丹が冬牡丹。冬の季節、神社や寺などでは、趣向を凝らして様様な冬牡丹を咲かせる。東京では上野東照宮のぼたん苑が人気。この句、「世の音を隔てて」が眼目。白の冬牡丹に見入っていると、いつか外界の音が消え、心が澄んでいく。斎藤茂吉が唱えた「実相観入」の境地が窺える。

甘蔗時雨石敢當へ石獅子へ 沖縄 玉城玉常

季語は「甘蔗時雨」で冬。「甘蔗刈」の副季語として歳時記にある。甘蔗（砂糖黍）は沖縄の主要農産物の一つで、収穫期が1月から3月頃、ちょうどその頃に降る時雨を「甘蔗時雨」という。雅な言葉である。「石敢當」は悪霊除けの石碑、道路の突き当たりなどに「石敢當」の文字を刻して建ててある。「石獅子」は石製のシーサー、魔除けや権威の象徴として村落の入口などに残っている。句意は明快。黒黒と濡れてゆく二つの石が、甘蔗刈の頃の沖縄の空気を伝えている。沖縄の皆さんの句にはいつも勉強させられています。沖縄の風土や文化に根差した句を、今後もしどし送って下さい。

新中央句会報 (3月例会)

令和7年3月23日(日) 東京文化会館

(出席23名)

江見 悦子 主宰選

切株の年輪いびつ山笑ふ 松浦陵保

白蓮やゆうれい坂を師の墓へ 南雲秀子

出刃光る桶や浅蜷の息遣ひ 三屋英俊

物納で済す裏山山笑ふ 長谷川信也

振り返るミモザの空の昂りに 一由久美子

スーパ―に歎異抄買ふ春の昼 内田郁代

ガラスペンにからまるインク風信子 沢辺たけし

枝先でへのへのもへじ春の風 松浦陵保

税申告済せ昼餉にカツサンド 南雲秀子

流木の枝のささくれ鳥雲に 大久保 進

永き日や顔をはみ出す大欠伸 中村千久

春耕の畑に鋤き込む糶の殻 塗木翠雲

⑧ 地団駄の下駄より剝がす春の泥 長谷川信也

⑨ 地団駄の下駄より剝がす春の泥 長谷川信也

下駄の齒が粘っこい春の泥にからまれて、進むに進めず、

地団駄を踏んで脱け出そうとするが、なかなかうまくゆかない。ようよう抜け出て道端の石に座り、木の枝で泥を剝すことが出来た。今時こんな春泥に出合うことはまれだろう。作者にとつて思い出の「昭和」の春泥なのか。その後泥を拭って乾かす下駄の有り様まで懐かしく想像した。

枝先でへのへのもへじ春の風 松浦陵保

「へのへのもへじ」を描く枝先は柳の枝か、あるいは枝垂れの糸桜か。風が枝先を揺らす様子を「へのへのもへじ」のようだと見立てている。枝が遊び、作者も又楽しんで遊んでいる。「枝先で」は、「枝先に」「枝先の」にすることも。

税申告済せ昼餉にカツサンド 南雲秀子

毎年、確定申告が近づくと税務署は内も外も大勢の人で一杯になる。混雑の中で提出を終えてほっとした作者の昼食は美味しいカツサンド。いつもよりちよつと奢った食事だ。義務を果たした自分へのささやかなご褒美である。

流木の枝のささくれ鳥雲に 大久保 進

季語「鳥雲に」は、日本で越冬した冬鳥が北方の繁殖地へ帰ってゆくときのさま。飛び立って群をなして高度を上げやがて雲間に入つて姿が見えなくなる様子という。

浜に残る流木の枝のささくれは、渡り鳥が晩秋に日本にやつて来た時に銜えてきた嘴のあとか。津軽外ヶ浜では、雁が

帰ったあと海岸に落ちてゐる木片を拾い集めて風呂を焚くという。そんな言い伝えを持つ「雁風呂」という季語を思つた。浜に残つた木片は日本で死んだ鳥のものと考へて雁の供養のために焚くのだそうだ。実際は北へ帰る時には木片は不要なのだが。はるかな憧れと渡り鳥の哀れさが感じられる、奥行きのある句に仕上がつた。

中村 千久 選

激しかりけりひと時の春の雪	吉中愛子
海恋うて月に砂吹く浅蜷かな	三屋英俊
口紅の色変へてみるチューリップ	安藤美酒々
囀がさへづりを追ふ朝かな	砂地宏子
輝きつ日の斑を散す野梅かな	塗木翠雲
山神へ謝意の一札わらび摘む	下嶽孝一
うたかたは魚のつぶやき鳥雲に	三屋英俊
物納で済す裏山山笑ふ	長谷川信也
乳呑み児の眼が追ふ庭や雀の子	下嶽孝一
沈む日に向けて舳挿す小舟かな	一由久美子
河口から零キ口表示土手青む	小池清晴
地団駄の下駄より剝がす春の泥	長谷川信也
④坂下は蛇道丁字香る道	江見悦子

④坂下は蛇道丁字香る道 江見悦子

一読して、谷中にある「蛇道」を思つた。うねうねと流れてゐた川を暗渠としたもの。散策する作者は、辺りから流れてくる沈丁花の香りに気がついた。「蛇道」「香る道」とリフレインした句またがりの一句の技巧に新しみを感じた。

海恋うて月に砂吹く浅蜷かな 三屋英俊

夜の台所で浅蜷が砂を吐き出すという俳句はたくさんあつて、掲句もそうしたところから発している。しかし、それを浅蜷がふるさとの海を恋しがっていると詠んだところが只者ではない。「認識と抒情の間」をしっかりと狙つた一句。

囀がさへづりを追ふ朝かな 砂地宏子

朝の散歩を楽しむ作者の耳に、早起きの小鳥たちの鳴き声が聞こえてきたのだ。鳴き交わす鳥たちの姿は見せずに、「囀がさへづりを追ふ」としたことで、賑やかな春の情景を描いてみせたのがよかった。

沈む日に向けて舳挿す小舟かな 一由久美子

以前に吟行旅行で訪れた宍道湖の夕景、嫁ヶ島の向うに沈む夕日を思い出しながら読ませていただいた。「舳さす小舟」の点景を得て、絵画的な抒情味のある一句に仕立てられた。

沢辺たけし 選

春窮や瑞穂の国に米騒動 奥 太雅

口紅の色変へてみるチューリップ 安藤美酒々

轉がさへづりを追ふ朝かな 砂地宏子

ガラス器に踊る白い根風信子 松井宣夫

うたかたは魚のつぶやき鳥雲に 三屋英俊

スーパ―に歎異抄買ふ春の昼 内田郁代

野ざらしの石臼下の蝌蚪の紐 安藤美酒々

沈む日に向けて舳挿す小舟かな 一由久美子

傍らに水車の朽ちし藪椿 松浦陵保

就活といふ噂聞く義士祭 長谷川信也

春耕の畑に鋤き込む稗の殻 塗木翠雲

指先を真直ぐ揃へ一年生 松井宣夫

④ 目刺焼く渋谷は遠くなりにけり 大久保 進

⑤ 目刺焼く渋谷は遠くなりにけり 大久保 進

下五の「遠くなりにけり」というと草田男の句を思い出す

が、この句は、「渋谷」が遠くなったと言っている。若者の

街と言われて久しい「渋谷」だが、仕事を引退している身に

としては確かに実感である。しかし、その分「果鴨」は近く

なっているのかも知れない。季語「目刺焼く」が利いている。

春窮や瑞穂の国に米騒動 奥 太雅

昨今の米の値上がりは米不足なのか、買い占めなのか、それを「米騒動」と詠んでいる。季語「春窮」の本意からみると、ちよつと外れているようにも思えるが、作者の新解釈として、難しい季語に敢えて挑戦したのかもしれない。

スーパ―に歎異抄買ふ春の昼 内田郁代
雑誌を売っているスーパ―マーケットならあるだろうが、

「歎異抄」を売っているスーパ―マーケットは正に想定外である。俳句は自分の琴線に触れたものを詠むものだが、意外性もその一要素である。

指先を真直ぐ揃へ一年生 松井宣夫

小学校か中学校か、入学式で整列した「一年生」の姿を生している。「指先を真直ぐ揃へ」に、これからの学校生活に対する希望と不安を併せ持った緊張感が表れており、一年生の初初しさ可愛らしさも感じられる。

今後の新中央句会の予定

▽6月22日(日) 東京文化会館 小会議室 13時より

▽7月27日(日) 東京文化会館 中会議室 13時より

内藤恵子氏を偲ぶ

先生、会いに来しました 南雲秀子（杜の会）

昨年10月31日、内藤恵子先生が亡くなられてから百箇日を過ぎた3月12日、「杜の会」のメンバー6名で先生のお墓参りに伺いました。

港区三田にある玉鳳寺という古刹で、幽霊坂という名の細い坂道を登ると、右側に風格のある山門が見えてきました。そこには「高橋是清寄進」と書かれた立札がありました。

山門を抜けると左手に赤い頭巾をかぶった愛らしい六地藏が並んでいます。墓地の奥へと少し迷い込みそうになりましたが、先生のお墓は六地藏のすぐ後ろにあつて、新しい卒塔婆がそれを教えてくれました。

朝から生憎の雨でしたが、お墓に着く頃には薄日も射して、「よく来てくれたわね」という先生のお声が聞こえてくるようでした。一人ひとりが、先生と久しぶりにゆっくりと語り合えたような、そんな安堵感を胸にして、椿が咲き蜜柑の実るお寺を後にしました。

白椿	山門	寄進	名	是清と	生駒	寿子
師の墓所を迷ひて訪ふや	沈丁花	草間	三香子			
香煙の煙る師の墓	紅椿	坂本	具子			
轉や恩師を偲ぶ	玉鳳寺	柴田	雅春			
白木蓮や幽霊坂を師の墓へ		南雲	秀子			
迷ひ道恩師の墓へ	春の雨	南場	雅子			

〈お詫びと訂正〉

5月号P78 内田郁代さんの原稿に一部間違がありました。お詫びして訂正致します。

誤	強東風や湖面の光すべりたる	田中道江
正	鳩羽色残る日没春深し	田中道江

〈新会員のご紹介〉

4月の加入者です。

佐々木 茂様 札幌市（再入会されました。）

万象基金のご報告

匿名 五口

（令和7年4月9日～4月30日・受付）
「万象」の発展のため、大切に使用させていただきます。

万象俳句会

「万象」句会一覧① (2025年5月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事
1	万象・新中央	第4日・1時 (変更あり)	東京文化会館	悦子・文代 千久	久留島・南雲 小池 080-1297-6113
2	札 幌	第1土・1時	道民活動センター	林 陽子	落合裕子 080-6098-3822
3	札幌北	第1水・12時半	篠路コミュニティーセンター	岡本敬子	中鉢弘一 011-598-6571
4	札幌北(吟行)	第3水	吟行地	岡本敬子	中鉢弘一 011-598-6571
5	札幌清風	第3日・11時	札幌真如院	大内和憲	大内マキ子 011-707-2259
6	札幌円山	第2火・6時	円山商店	濱谷和代	北浦詩子 090-9085-4391
7	新 潟	第1日・1時	新潟市中央公民館	高橋ひろ	高野松風 070-2828-7962
8	河 交	第3日・1時	新潟中地区公民館	高野松風	佐藤幸示 025-268-3232
9	佐野・みかも	第4火・1時	佐野城山記念館	亀田・加藤	阿部・義本 0283-23-0747
10	風 車	第2土・1時	佐野城山記念館	大木 茂	芝宮留美子 0283-25-2155
11	昂	第3水・1時半	佐野城山記念館	亀田やす子	茂木弘子 090-4456-2204
12	新 樹	第1金・1時半	佐野城山記念館	増田幸子	上岡佳子 0282-62-5138
13	皐月・すずかけ	第1火・1時	佐野城山記念館	増田幸子	売野 緑 0283-25-2109
14	佐野合同吟行	毎月25日	吟行地	亀田やす子	芝宮留美子 0283-25-2155
15	二 荒	第1木・1時半	宇都宮市中央公民館	阿久津勝利	阿久津勝利 028-662-8020
16	芳 賀	第2土・1時半	芳賀町民会館	勝利・かし子	福武幸子 028-678-0175
17	志木木犀	第2日・1時	志木ニュータウン東武集会所	中村千久	板垣陽子 048-465-7217
18	浦 和	第3日・1時	大妻女子大学	中村千久	砂地宏子 0422-47-3402
19	千 葉	第2土・1時	船橋市勤労市民センター	たけし・郁代 英俊	古川・田中 04-7163-3962
20	つばき	第1日・1時	船橋市勤労市民センター	内田郁代	久保村淑子 047-462-3711
21	小金原	第2 第4金・1時半	小金原老人福祉センター	沢辺たけし	寿多映子 047-343-1788
22	成 田	第1日・1時	都賀コミュニティーセンター	太雅・佐奈枝	塗木翠雲 090-5753-9873
23	うする	第3月・1時	白井ニコウ会館	英俊・良子	横川良子 043-487-2625
24	都 賀	第2日・1時	都賀コミュニティーセンター	英俊・玲子	高田みや子 090-7011-6144

「万象」句会一覧② (2025年5月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事
25	柏	第2日・12時	アミュゼ柏	とく江・郁代	内田郁代 047-163-6810
26	柏吟行	隔月 曜日不定	吟行地	とく江・郁代	当番制
27	東京俳句スクール	第2火・1時	高井戸地区区民センター	江見悦子	吉中・藤田 044-986-1667
28	成増けやき	第2木・1時	板橋区立アクトホール	下嶽孝一	下嶽孝一 090-3540-7471
29	本郷(通信)	月1回		山本右近	桔梗 純 042-726-0174
30	杜の会	第1水・1時	文京区男女平等センター	赤堀・南雲	南雲秀子 042-946-5536
31	小松川	第1日・10時	松葉会館	江見悦子	長谷川・前川 03-3685-8754
32	横 浜	第2日・1時	かながわしプラザ	小林愛子	大久保 進 044-333-1054
33	横浜洪福寺	第3金・正午	ほどがや地区センター	小林愛子	榎本文代 045-953-4246
34	保土ヶ谷	第2木・正午	西谷地区センター	小林愛子	星野信子 080-6505-0666
35	あさひ	第4火・正午	上白根コミュニティセンター	榎本文代	後藤晴子 045-954-1519
36	金沢文庫	第3日・1時	谷津坂会館	大橋雅子	加藤和子 045-773-6961
37	戸塚品濃	第2月・1時	品濃クラブ	恒川清爾	恒川清爾 0467-32-6578
38	ミモザ	第1木・10時半	榎本文代宅	榎本文代	榎本文代 045-953-4246
39	川 崎	第1日・1時	教育文化会館	柳澤・新妻	新妻奎子 044-573-9249
40	伊勢原	第4水・10時	中央公民館	吉中・佐藤和	佐藤和子 0463-93-3979
41	静岡青葉	第1日・9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	藤本節子 054-282-7970
42	静岡 葵	第1日・1時半	大里生涯学習センター	荻野加壽子	石川裕子 054-282-8577
43	静岡大里	第1水・1時	大里生涯学習センター	藤原千代子	藤原千代子 054-286-3719
44	静岡木曜	第3木・1時半	大里生涯学習センター	大長文昭	大長文昭 054-282-1063
45	小判草	第1日・9時半	静岡市番町市民センター	小川明美	矢野喜久江 054-283-5216
46	登呂通信	月1回	(通信)	小川明美	本多ひとみ 054-335-5107
47	風の谷	第2金・1時半	北部生涯学習センター	小川明美	鈴木美由紀 090-9175-8598
48	静岡放送俳句講座	最終土・10時	SBS 学苑	小川明美	本多ひとみ 054-335-5107

「万象」句会一覧③ (2025年5月現在)

	句会名	開催日時	会 場	指 導	幹 事
49	井 川	第4金・3時	井川学習交流館	大村峰子	宮崎知恵美 054-260-2355
50	満点会吟行	随時	吟行地	小川明美	松永博子 090-6331-5071
51	時雨窓	第3水・1時半	東部生涯学習センター	小川明美	杉田義則 054-261-2245
52	青田風	第4水・1時半	東部生涯学習センター	小川明美	長谷川洋子
53	なでしこ	第2水・10時	番町市民センター	望月敏男	田中秀幸 054-252-5295
54	季節風同人	4/8/12月 第1土9時半	大里生涯学習センター	神田美穂子	当番制
55	季節風吟行	年2回	吟行地	神田美穂子	当番制
56	富士花野	最終金・9時半	富士駅北まちづくりセンター	神田美穂子	縣 昌司 0545-63-5697
57	赤ベン	第1土・1時半	遊亀庵	荻野加壽子	荻野加壽子 054-262-2486
58	堅香子(通信)	毎月15日		神田美穂子	藤本節子 054-282-7970
59	あかね	第1木・1時	四高記念館	井村・谷渡	伊藤・松井 076-239-2103
60	白 菊	第4水・1時	西光寺	中條睦子	伊藤美音子 076-239-2103
61	蘭	第3水・1時	泉野図書館	井村和子	豊田高子 076-252-2028
62	ふれあい	第1 第3水・1時半	コミュニティセンター金ヶ崎	谷渡末枝	谷渡末枝 0767-68-2187
63	敦 賀	第2金・1時	北公民館	鶴田勝子 中村 優	中川雅月 090-2038-2444
64	まつかぜ	第4火・1時	北公民館	中村 優 鶴田勝子	中川雅月 090-2038-2444
65	徳 島	第4土・2時	万福寺	福島せいぎ	福島吉美 088-625-1500
66	芙 蓉	第1水・1時	男女共同参画センターアミカス	小林愛子 (後日選)	宮田千恵子 092-861-4605
67	長崎鳴滝	第3日・1時	鳴滝西部公民館	丸本祥夫	永田美知子 095-822-8624
68	宮崎ひむか	第1土・11時	ホテルマリックスラグーン	中山宣・芳教	鳥居達史 090-9406-8807
69	真南風	第1土・2時	ふう	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
70	ふうせん	第2土・2時	ふう	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
71	インシャラー	第4日・3時	インシャラー	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086
72	ふうの吟行	第3日	朝から吟行後ふうにて句会	前田貴美子	前田貴美子 098-834-7086

*記載事項に変更のあった場合は、総務の久留島(080-1297-6113)までご連絡ください。
次回は12月号に掲載します。

最近の名句集を探る

座談会

青木百舌鳥『めらめら』
青木ともじ『みなみのうを座』
鈴木総史『水湖いま』

大西朋
司会・筑紫磐井
藤本美和子
渡部有紀子

俳人協会新人賞・
田中裕明賞受賞記念
作品20句 浅川芳直

◎巻頭三句

小川軽舟／辻恵美子
和田順子／復本一郎
伊藤康江／樽谷青濤

◎今月の華

久保純夫／吉田林檎

◎俳句と短歌の10作競珠

駒木根淳子＋中川佐和子

◎今月のハイライト

「澤」創刊25周年

人々作品

青木ともじ句集
『みなみのうを座』

一句鑑賞
観講
今泉礼奈／黒岩徳将
山田耕司

えんぶり吟行記◎大西朋

成瀬政博
とりあえずの日々
筑紫磐井
俳壇観測
◎好評連載

坂口昌弘

忘れ得ぬ俳人と秀句
青木亮人

句の手触り、
俳人の響き
大西朋

俳句へのまなざし
井上泰至

俳句の詩語
イメージ辞典
神作研一

てのひらの江戸
古今籍を旅する
高屋重三郎の手掛けた
本の図版を掲載

藤村公洋
俳句のつづみ
謎矢まりえ
諸家書架
二ノ宮一雄
一望百里

俳句四季
Haiku Shiki

2025年6月号

5月20日発売
定価1100円(税込)
<https://www.tokyoshiki.co.jp/> 東京四季出版

〒189-0013 東村山市栄町2-22-28 ☎042-399-2180

俳句

6月号 予告

5月23日発売

予価 1,200円(本体1,091円)⑩

巻頭作品50句 一片山由美子
作品21句 一行方克巳・恩田侑布子

生誕120年
加藤楸邨

特集

▽総論 石寒太&江中真弓
▽作品論 中嶋鬼谷&今井聖
▽楸邨山脈概要 ▼一句鑑賞 ▼楸邨散文探訪

第59回 蛇笏賞発表！

●受賞のことは ●自選50抄
●選考委員選評 高橋睦郎・中村和弘・
高野ムツオ・正木ゆう子

※内容は変更になる場合があります。

電子版同時発売！ 電子版は「BOOK☆WALKER」(<https://bookwalker.jp/>)など電子書店で購入できます。

発行 角川文化振興財団 発売 株式会社KADOKAWA <https://www.kadokawa.co.jp/>

ルビーの小函 (6月号)

「同人作品」「万象作品」に掲載された漢字表記でルビを振らなかったもののうちから、読みにてこずりそうなものを拾ってあります。作品鑑賞の参考にしてください。太字は季語ですから歳時記で確かめてください。読みは現代仮名遣いにしてあります。

(編集部・校正担当)

- 7 ペン胼胝 (ペンだこ)
骸 (から)
鮮しく (あたらしく)
- 8 身八口 (みやつぐち)
宙 (そら)
- 9 貝釦 (かいぼたん)
久闊 (きゅうかつ)
- 11 料峭 (りょうしょう)
斑雪 (はだれ)
潮 (うしお)
- 12 縹色 (はなだいろう)
春榆 (はるにれ)
- 13 呶れば (あおれば)
- 14 施無畏 (せむい)
訪ふ (おとなう)
- 15 羽二重 (はぶたえ)
昨夜 (よべ)
間 (あい)
訪ふ (とふ)
- 16 鳩 (にお)
一舟 (いっしゅう)
- 17 春霞 (しゅんさん)
塗れ (まみれ)
御御付 (おみおつけ)
篁 (たかむら)
- 19 木沓 (きぐつ)
脂 (やに)
- 20 奪衣婆 (だつえば)
龍吐水 (りゅうどすい)
- 22 瓦斯灯 (ガスとう)
紅絹 (もみ)

- 24 水草生ふ (みぐさおう)
東司 (とうす)
- 25 霾 (つちふる)
疾うに (とうに)
- 26 金縷梅 (まんさく)
陵 (みささぎ)
急す (せかす)
- 27 復習ふ (さらう)
美し (うまし)
巖 (いわお)
螺鈿 (らでん)
- 28 針魚 (さより)
干鱈 (ほしざより)
- 29 甌穴 (おうけつ)
進る (ほとばしる)
曲輪 (くるわ)
- 36 白木蓮 (はくれん)
- 57 鯉 (さわら)
- 58 独活 (うど)
空家 (あきいえ)
考 (こう) *亡き父
- 59 手水舎 (ちようずや)
公魚 (わかさぎ)
- 62 実生 (みしょう)
家苞 (いえづと)
春疾風 (はるはやて)
- 64 蘆牙 (あしかび)
- 65 石尊 (あおさ)
鷄冠 (とさか)
- 66 六花 (むつのはな)
- 70 風信子 (ヒヤシンス)

東 西 南 北

消息等

故内海良太名誉主宰、江見悦子主宰、小林愛子名誉顧問の句

「くちら」4月号に

閑されて水面に揺るる白障子 悦子

「しろはえ」4月号に

雲海にひろがつて来し初明り 良太

足弱の夫送り出す冬たんぽ 悦子

師の墓の木立に棲みて冬の鵲 愛子

「初蝶」4月号に

雪吊を統ぶるや鷺の天辺に 悦子

「たかな」3月号・4月号に

一病の話一巡新酒酌む 悦子

水底に雪吊の縄ゆがみたる 悦子

毎日新聞「季語刻々」(坪内稔典氏)に細見綾子先生の句(4月7日)

チュウリップ喜びだけを持つてゐる

句集「桃は八重」(1942年)にある句

この句集には「そら豆はまことに青き味し

たり」「菜の花がしあはせそうに黄色して」

「ふだん着でふだんの心桃の花」「つばめつ

ばめ泥が好きなる燕かな」などの思いが率

直、表現が端的な句が並んでいる。今日の

句、チュウリップに「喜びだけ」を見たのも率直にして端的。いいなあ。

成田吟行句会 3月15日

千葉県佐倉市の創業天保元年の「旭鶴」

酒店、社長の案内で酒蔵の見学、並びに明治24年に正岡子規の訪れた子規の「かくれ

み」に出てくる場所を吟行。参加者5名。

百観音数へてをれば底冷えす 大内佐奈枝

亀鳴くや観音道の子規の句碑 中嶋久登

山笑ふまわたり宿の百羅漢 松浦隆保

参道に百観音や牙返る 安奈 朝

如月や試飲に酔ひし蔵の酒 塗木翠雲

小松川吟行句会 4月6日

吟行地は荒川の河口に近い土手沿いの小

松川千本桜。天候は薄曇り、桜はほぼ満開

に近い状態。当日は「千本桜祭り」が行わ

れており、多くの屋台やテントが立ち並び、

人が溢れていた。吟行参加者8名、欠席投

句4名。

園児の声空に広がる春うらら 山森明子

名物の銀座あんぱん隣に花 大場八朗

持ち堪え咲き誇りたり花の山 蕪木静子

老い二人手押し車の花見かな 宮崎正義

土手歩む花一輪の小宇宙 齊藤孝夫

右に折れ左に折れて桜狩 松井宣夫

花びらをひろふ幼児と手をつなぎ 前川 昇

花曇荒川土手を歩きたる長谷川はるみ

春日和バギーに埋まるエレベーター 柴田雅春

「静岡市民文芸」第二十号 (令和7年3月8日付)

○市長賞

合はす手の火照りしままや原爆忌 荻野加壽子

○奨励賞

杉澤修・望月敏男・加山ひさ子

○佳作

田中秀幸・伊東文恵・松永博子・石川裕

子・杉田義則・永田公香・藤原千代子・長

谷川洋子・大長文昭・藤本節子・中澤祐一

第22回「富士山を詠む」俳句賞

(富士宮市教育委員会 文化課主催)

○入賞

須藤常央 特選

大富士へ百の放水出初式 藤本節子

○入選

杉澤修・藤原千代子・伊東文恵

(報・編集部)

(←この線より切り取ってください)

令和七年

万象作品

十月号

(七月十五日締切)

(句の表記は歴史的かなづかいで) (*の枠内には何も書かないでください)

	*
--	---

[illegible]

	*
--	---

[illegible]

*	
---	--

都または市・町・村名	
姓 号	がなり
	年齢

9390364

射水市南太閤山13
|
24

万象作品投句係行

110円切手を
貼ってください

氏 名	住 所

〈通信欄〉

編集後記

▽2006年発行の「万象」誌、創刊五周年記念号を読み直しました。その中で大坪景章氏（発行人）が、「即物具象の写生」だけが独り歩きしている。「俳句実作のための態度・方法としての」という前段が肝心であると繰り返し返しています。即物具象の写生は、あくまでも方法であって目的ではないのだと。モノを見て「あッ！」という感動を得、これを言葉にすることだと心したことでした。

（千久）
▽花の季節に横浜を吟行した。かつて10年以上を過ごした街は、保土ヶ谷句会に参加し始めた頃の思い出と重なり、何処も懐かしい景色だった。元町・中華街駅からエレベーターを乗り継いで、屋上の外に出ると、そこはアメリカ山。とりどりの花に迎えられた。句帳を片手に界限をぐるりと巡り、楽しい一日となった。

（規子）
▽今年は桜を長く楽しむことができた。毎日夕方4000歩を目標に歩いているが、その道すがら80本以上の桜を楽しみながら一週間程が過ぎた。明日は一日中雨。飛花落花を楽しむことなく桜の季節が終わるかも。今年は桜の句をまだ一句も詠んでない。

（美穂子）
▽定年になって朗読を始めた。爾来12年。週一度のレッスンをひたすら受けてきた。声に出すことで小説や随筆の解釈が深くなるように思えるようになってはきたが、身体に染みついた発声の癖はなかなか治らない。しかし、12年かけて変わった部分もある。今月15分ほどの作品を読む。

（宏子）
▽確定申告時、寄付金控除の記入にあたり寄付先とその住所という項目がある。公益財団法人官休庵（武者小路千家）への寄付なのだが、その住所は「京都市上京区西無車小路町」とある。「無車小路」に「武者小路」がある？ 狐に化かされたような気がした。「無車小路」は行政区画上の地名、「武者小路」は茶道の家元の名前である。どちらが先か？

（清晴）

会員を募ります

会員は左記の会費（誌代）を前納していただきます。

一年分 一二、〇〇〇円

会費の納入は左記の振替をご利用ください。新会員は必ずその旨明記。

郵便振替口座 00230・0・103581

万象俳句会

住所変更届・退会届等については、必ず封書又は葉書にて、左記へご連絡願います。

〒284-0015 四街道市千代田1-7-10 塗木翠雲

万象 六月号

第二十四巻 第三号

通巻 第二七九号

令和七年六月一日 発行

主宰 江見悦子

発行人 江見悦子

編集人 中村千久

〒168-0072

東京都杉並区高井戸東一三二一六

1603 万象発行所

☎〇三六三二四一五七九六

第二十三回「万象俳句賞」作品募集

万象俳句賞は毎年一回広く作品を募り優秀作を表彰、「万象」俳句の向上・発展に資するものです。多数の応募を期待いたします。

作 品

一人20句 未発表新作に限る

原稿用紙など二枚に縦書きとし、一通（コピー可）提出

原稿の冒頭に題名を、末尾に住所・姓号を明記

封筒に「万象俳句賞応募」と朱書のこと

メールでの応募の場合は、応募原稿と必要事項を添付して送りください

選 者

江見 悦子 小林 愛子 中村 千久 福島せいぎ 前田貴美子

榎本 文代 神田美穂子 林 陽子 三屋 英俊 沢辺たけし

応募資格

「万象」同人・会員に限る

締 切

令和7年6月末日到着分までを有効とする

宛 先

〒二七〇一〇一六 千葉県流山市中野久木五六三一一一

穂苅 照子（万象俳句賞事務局）

〈メール〉 6845ubwn@jcom.zaq.ne.jp 〈電話〉 〇九〇一二四二七―五一七五

入賞発表

「万象」10月号 全国俳句大会で作品一席に万象俳句賞を贈る